

---

**姉上。スカートをまくって股を開いて見せてくれませんか？**

---

サクチル

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姉上。スカートをまくって股を開いて見せてくれませんか？

### 【Nコード】

N6291EP

### 【作者名】

サクチル

### 【あらすじ】

弟が人探しを始めた。

仮面舞踏会の夜に童貞を捧げた女性を探しているらしい。

……うん、ごめん。それねーちゃんなんだ。

無論名乗り出る気はない。

義姉弟ものです。本編7話＋おまけ（多いです）

酷いタイトルですが割とまともな恋愛小説…なハズ。

感想に対する返信を行っておりませんが、読んでいます。有難  
うございます。

## 第1話（前書き）

お月様一歩手前だけど、これくらいなら大丈夫と信じる。

## 第1話

弟が人探しを始めた。2日前我が家で行われた仮面舞踏会で、酔っぱらった女性を別室で介抱していた際にムラムラして、致してしまつたらしい。仮面舞踏会で仮面をしていて仮面をつけたままフィニッシュまで決めて、そのまま隣で眠ってしまったので、顔はわからず。朝起きるとそのご令嬢は消えていたので結局誰だかわからない。しかし自分の童貞<sup>チェリー</sup>を捧げた相手なので是非とも責任を取りたいと言つて探している。中に発射で連戦<sup>フルハッスル</sup>したもんね。身体の相性が良かったんだろうね。

ごめんよ、弟。

その相手はねーちゃんだ。

朝起きた時は血の気が引いたよ。弟相手にアンアンよがつてた記憶があつたもんだから。因みに弟と私は血が繋がっていない。両親ともに再婚で、私は母の連れ子である。法律上は何の問題もなく結婚できる。だけれど私は名乗り出るつもりはない。

「あらあらあ…酔っ払いに食べられてポイ捨てされた侯爵子息様ではなかつて？」

廊下の角で弟の姿を目にした。いつも通り弟に近付いて挨拶する。

「姉上…」

弟…アルトに敵意のこもった視線で見られる。

そう。私たち姉弟は超仲が悪いのだ。というのも私が天邪鬼で、アルトが素直で顔面通りに言葉を受け止めるものだから険悪な感じなのである。私は言語も態度も特殊な自覚はある。これを直せば多少

なりとも他人に好かれるのではないかと、今まで何度も直す努力をしてきて、その度に挫折している。

「今に『私がお相手です』というご令嬢たちが溢れかえるのですから、お困りになる前に人探しは諦め方がよろしくてよ?（訳：やめときなつて。大ウソつきのご令嬢に力モられるよ!）」

すごく厭味ったらしい口調になってしまふ。私は素直になれないというか、こういう性格なのだ。私としては本当に心配して、思いとどまるように説得してるつもりなんだけど。アルトには皮肉に聞こえていると思う。

「放っておいてください。僕は必ず彼女を見つけてみせます。」

「あらあら、わたくしの親切な忠告は聞いた方が身のためですわよ。

（訳：悪いこと言わないからおねーちゃんの言うこと聞きなさい。）

「

パサリと扇子で口元を覆った。

「姉上は大嫌いな僕に運命の女性が見つからなければいいと思ってるのでしょうか?」

「まあ。運命の女性とは大きく出ましたわね。仮面を剥いたらただ女狐かもしれなくてよ?きつとがっかりですわね。おほほほ。（

訳：素敵な思い出は素敵な思い出のまま、謎のヴェールに包んでおこうよ!私みたいな女狐だったりしたらがっかりするでしょ?）」

「彼女は、そんな人ではありません!」

「まあ、どうしてそのようなことが言えるのかしら?」

「切なく僕の名を呼び、縋りつく健気な様を姉上は知らないからそのようなことを言うのです。」

知ってるよ！ご本人ですから。死ぬほど気持ち良かったし、縋りついていっぱい鳴いたね。

「まあ、こんな白昼に閨事のお話とは。耳が穢されそうですわ。（訳：恥ずかしいからそういうこと言うのはやめて！）」

「姉上こそ、何故僕を見る度に絡んでくるのですか？」

「仕方ないですわ。目障りなものですもの。（訳：気になっちゃうんだもん。）」

ぱちんと扇子を閉じてアルトとすれ違う。

ああー…運命の女性とか。それ理想の女性像膨らましてるでしょう？正体知ったら絶対がっかりする。アルトが蛇蝎の如く嫌っている姉に童貞食われたとか。私も勿論処女だったわけだが。ていうかもろに中に発射されたけれど、孕んでたらどうしよう。胃がキリキリする。アルトに責任とってもらう？ないない。それだけはない。私はアルトのこと嫌いじゃないけど、アルトは私のこと大嫌いだろうし。

私は酒に酔うと幾分態度や言語が素直になる。酔っぱらいながら「アルトに構ってほしい」と思い、素直に絡んだのだ。ふわふわの頭ながらきちんと相手がアルトと認識して。アルトは瞳が紫と緑のオッドアイだから、仮面をしていても、至近距離で見れば一目瞭然である。逆に私はこの国で最も多い茶髪に青い瞳という配色なので仮面をしたまま本人を割り出すのは難しいと思う。仮面と言っても鼻から上を覆うものだけど、大分印象が変わって見えるし、私も普段着ないようなピンクのドレスとか着ていたし。

ああ、気が重い。

アルトはディナートール侯爵家の嫡男だから、絶対狙ってる女性は「我こそは！」って名乗り出ると思うよ。

ダイニングへ行く。大きなテーブルと椅子の沢山ある広々としたダイニングだ。お客様を呼んでも大丈夫な造り。クロスのかけられた

清潔なテーブルに座り心地の良い椅子。大きな窓からは明るい光が差し込んで実に清々しい。

「ロレッタちゃん。おはよう。またアルト君と喧嘩したの？」

お母様がおかしそうに笑った。お母様とお父様がダイニングで仲良くお茶を飲んでいたのだ。もうお二人とも朝食は済ませたようだ。相変わらず仲睦まじい。

「喧嘩などしておりませんわ。夢見がちな弟に忠告して差し上げていただけよ。」

ツンと澄ました。

聞き入れてもらえなかったけどね。「我こそは！」と名乗り出てアルトをすっかりさせるつもりはないけれど、アルトが偽物のチェリーイーター連れてきたらすごい微妙な気持ちになるんだけど。「アルト、騙されてるよ。」とは証拠がないから口にできない。もしかしたら初夜を迎えたら抱き心地の違いに気づくかもしれないけど、手を出してからじゃ遅いんだよ。

「ロレッタちゃんはアルト君が大好きだものねえ。」

「だ、大好きなどでは……」

嫌いじゃないけど……顔が熱くなる。

「アルトもロレッタちゃんの可愛らしさに気づけば良いのに。勿体無い。」

お父様が溜息をついた。

お父様もお母様も私の良き理解者だ。私の言語や態度が普通のご令



嬢と違っていることは重々承知しているが、それも私の『味』として認めてくれている。特に私が自分で直そうと、鏡に向かって笑顔で話しかけてみたり、人形に向かって話しかけてみたり、お母様に向かつて小一時間かけてやっと「いつもありがとう…」の一言を搾り出してみたりと涙ぐましい努力をしているのも知ってるので、両親から「態度を改めろ」と言われたことはない。

「なんだか昨日は体調が悪かったみたいだけど、今日は大丈夫なの？朝食は食べられる？」  
「いただきますわ。」

昨日は、ほら、一昨日連戦したから流石に身体に色々不具合をきたしていて。初めてだったし。精神的にも色々折り合いがつかなくて朝食などもつてのほかで、一日中部屋にこもり、お風呂には入ったけどそれっきりだった。

精神的には「過ぎたことを悩んでも無駄。孕んでたら孕んでた時に考えよう」という結論に落ち着いた。肉体的にもお風呂で色々処理して落ち着いた。

料理人が私の為に作ってくれた食事を有難く頂戴した。美味しかったです。

## 第2話

案の定「我こそは！」というご令嬢が溢れかえった。「私婚前交渉しました」っていう名乗りな訳だが、彼女らはそれでいいのだろうか。

髪は染めていたとしても、背丈が違う、瞳の色が違う、体格が違う、声の違い過ぎている…と落選していくご令嬢たち。

その中で選に残ったご令嬢たちにアルトは「絶対に自分こそ僕の探しているご令嬢だと神に誓えますか？」と尋ねた。「勿論です。」と答えたご令嬢たちに「では、スカートをまくって股を開いて見せてください。」と要求した。いかがわしいことが行われないか使用人が見張る最中にある。勿論ご令嬢方は大激怒。怒って帰って行った。勇気を出して言うとおりにしたご令嬢たちも、「あなたは僕の探していた女性ではないようです。」と言われてすごすごと帰って行った。

私にはアルトが何を探していたのかはつきりと分かった。私の右足の内腿には小さな黒子が3つある。3つを線で結ぶと丁度小さな正三角形になるような。それを探しているのだろ。普段誰にも見せないようなところだし、この黒子はある程度私が大きくなってから現れたものだから、この黒子の存在は母すら知らない。まさに私に股を開かせたことのある男性しか知らぬこと。

絶対見つけてみせると気負いこんでいたアルトは全女性が空振りに終わって落ち込んでいた。

私は偽物のチェリーイーターが現れずほっとした。アルトが騙されるのはすごく気持ち良くないし。

「ほほほ。女狐に騙されずに済んで良かったではないですか。」

慰めているつもりなのだが、アルトは憂鬱そうに溜息をついた。

「どうして名乗り出てくださいらなかったのだろう。あんなに激しく愛し合ったのに…」

「……。」

「…？姉上…お顔が赤いようですが…」

「なんでもありませんわ。」

ブイツと顔をそむけた。愛し合ったと言われると…確かに普段の私からは想像できないくらい甘い声で何度もおねだりしたもんね。正直自分の口走った台詞を脳内再生すると羞恥で死ぬる。

「…姉上は、アドヴァンス殿からのご求婚、お受けになるのですか？」

アドヴァンス様はアドヴァンス・ドラレク公爵様のこと。28歳と私よりも10歳年上ではあるが、美男で優しく、ご令嬢方にはとても人気がある。こういうわけだが、私にご執心だ。先日私宛に婚約の申し込みが来た。

「まだ考え中ですわ。」

とりあえず次の月経が来ないと何も返答できない。まあ、処女膜は既に消失しているのだが。処女膜は馬に乗ったりなど、日常の動作で破けてしまうものもくはないようだから何とかなると信じている。でも妊娠していたら婚姻は絶対に無理だと思う。婚約をお受けして後から「別の男の子供を孕んでました」なんて言ったらどんな恐ろしいことになるか…

「……アドヴァンス殿は優しくても、女性に気の多い方だと聞きま

す。お勧めはしません…」

アルトが憂鬱な顔でそう言った。アルトは私の婚約には反対なようだ。

「まあ。あなたの事だからてつきりわたくしを家から追い出したが  
ると思っておりましたのに。意外なことを仰るのね。どういう心境  
の変化？」

「……。」

アルトは真っ赤になって私を睨んだ。

「ほほほ。まるでヤキモチを妬いているみたいでしてよ。」

からかうとアルトはますます真っ赤になった。

「もう姉上なんて知りません…」

アルトは足早に立ち去ってしまった。まさか本当にヤキモチだった  
り？まさかだよな。

心配してくれたのだろうか。それともおねーちゃんがなくなると  
思ったら寂しくなっちゃったのだろうか。私アルトにはきついこと  
しか言っていないから寂しいはずもないと思うけど。前にアルトから  
「大嫌いです。」と言われたこともあるし。私たち姉弟の仲は評判  
の陰悪さだ。主に私が悪いんだけどね。

\*\*\*

ハラハラしたもののきちんと月経はやってきた。良かったー。孕ん  
でたら絶対に「誰の子だ？」って聞かれるもんねー。馬鹿正直な答

えを出せばアルトが傷つくかもしれないし。おねーちゃん安心です。でもアドヴァンス様のこと真剣に考えないとなー…私ももう18。女性は20を超えると一気に行き遅れ感が出るもんね。あと2年しか猶予ないし、前向きに考えないと。アルトが「気が多い方」だっ  
て言っただけ、本当かな？私、結構ヤキモチ焼きだから、愛妾持ちとかはご遠慮願いたいのだけれど。

「どうしたんだい？ロレッタちゃん。ぼんやりして…」

お父様に尋ねられてしまった。朝食の席でスーpsプーン片手にぼんやりしてたからなあ。コーンのポタージュは美味しいのだけれど。

「少し…アドヴァンス様のことを考えていただけですわ。」

「はっはっは。ロレッタちゃんも恋煩いか？我が家も春だなあ…」

お父様は笑った。

「……っ！御馳走さま！！」

アルトがガタンと席を立った。

「アルト、お行儀が悪いぞ。」

「……。」

アルトはお父様を無視して去って行ってしまった。虫の居所でも悪かったのだろうか。まだ料理も残っているのに。

お父様は、はあ…と溜息をついた。

「さっさと自覚せねば後悔することになるというのに…」

お父様は独り言をつぶやいた。お母様は苦笑していらっしやる。

「それで、アドヴァンス殿とのお話は進めても大丈夫なのかい？」

「望めばすぐに手に入るほどわたくしお安くなくってよ。（訳：少し考える時間が欲しいです。）」

「じゃあ、その気になったら教えておくれ。ただ、あまり待たせすぎてはいけないよ。」

「お相手次第ですわ。（訳：よく見て考えます。）」

私の特殊な言語を聞いてお父様とお母様も笑っていた。

「お父様も、お母様も、このわたくしを嫁すに相応しい方かちゃんと御承知ですよ。（訳：アドヴァンス様ってどんな人？）」

「調べさせてみたが、女性関係は割と華やかな方だよ。ただ、未亡人と上手に遊ぶとか、上手くやつてる人だね。婚約まで申し込まれたご令嬢はロレッタちゃんが初めてだよ。」

女性関係が華やかと聞いて渋い顔になる。結婚して女遊びが治まる方なら、婚前のことまで口を出すつもりはないけれど、どういう思想の持ち主なのかしら？時々お会いするときは私の悪態を聞いて「可愛い」「可愛い」とメロメロしているけれど。

「お母様はどうお思いですか？」

「とても素敵なお方ですけど、私ならちょっと遠慮したい方ね。家としては悪いお話でもないし、最終決定はミカルドとロレッタちゃんにお任せするわ。」

ミカルドというのはお父様の名だ。因みにお母様の名前はカーラだ。お母様はお勧めでないのか……その評価はちょっと考えてしまうのだよ。

「俺はロレッタちゃんのことを尊重するが、俺もあまりお勧めではないな。悪い方だとは思わんが…」

お父様もあまり乗り気でない模様。どこことなく歯に物が挟まったような物言いをしている。

うーん…両親ともにお勧めでないとするとちょっと…それでも私が恋焦がれるような人なら反対はしなさそうだけれど。アドヴァンス様なあ…

## 第2話（後書き）

本編には出来てませんがアルトは16歳の設定です。



### 第3話（前書き）

貴族言葉にも翻訳入れました。

ちよつと紛らわしい表現もあるので、一応ロレッタちゃんの翻訳が必要な発言には全部。

### 第3話

夜会に出席した。今晚は仮面舞踏会ではないし、通常の夜会だ。我が家主催でもない。ソロック侯爵家主催である。ソロック侯爵家の所有する中々大きなホールで行われた。高位貴族はこういった大ホールを所持しているものが多い。我が家にもあるが結構維持が大変だったりする。細かな細工の施されたシャンデリアとか、下ろして磨くのも一苦労ですもの。私はその労働を味わったことはないけれど、侍女や侍従は大変そうにしている。

今夜はその夜会に美しい濃紺のドレスで出席した。夜空のような濃紺に銀の星のようなビーズが縫い付けられている。

「ロレッタ様、お久し振りですわ。」

友人のバーベナ様が声をかけてきた。バーベナ様は私と同じ茶色い髪に青い瞳。私よりだいぶ明るい水色の瞳かな？猫のようなアーモンドアイ。髪も私と違ってストレート。体つきもシュルンとしなやかで細い。御気性も気まぐれな猫の様な方である。

「小憎たらしい顔も久しぶりに見ると味わいがあるものですわね。」

（訳：お久し振りですね。顔が見られて嬉しいですわ。）

「相変わらずですわね。今日は噂のアルト様はご一緒ではないの？」

バーベナ様はロレッタ語も上手に翻訳できるので、とても親しげだ。私の厭味つたらしい発言も飄々と流している。

「一緒に馬車で来ましたわ。今どこにいるかは知りませんけれど。噂……？」

アルトとは一緒の馬車で来て会場で分かれた。一緒の馬車で帰るつもりではいる。

噂ってどんな？私はこの通り口を開けば悪態しか出ないような他人に好かれない少女なので社交界に出ても、あまり親しくお話をしてください方はいない。必然的に情報量も少ない。

「淑女に『スカートをまくって股を開いて見せてください』って仰ったそうですわね？色んな意味で大評判ですよ。」

「まあ……」

どうしよう、アルトの評判が大変なことに……

おねーちゃん心配です！

「失礼で汚らわしいって仰る方もいるようですけれど、男らしいって仰る方もいるわ。アルト様が褥を共にしたご令嬢の股に何があるのか、みんな気になっているようですわよ。」

「社交界の方々って相変わらず暇人ばかりですね。（訳：くだらない話ばかりして！いやんなっちゃう！）」

「ふふ。今お話ししたので、わたくしも暇人の一人ですわ。」

二人で楽しく（？）お喋りした。バーベナ様は気さくな方なので情報通。色んな噂を教えてくれる。今最もホットな話題はベアトリーチエ様がご病気を患い、王太子様の婚約者を降りたというお話。「娘を王太子妃に」やら「王太子妃になりたい」だの王家周辺は中々騒がしいらしい。ベアトリーチエ様の破談もご病気ですってことになってるけど、本人の駆け落ち説が有力。ベアトリーチエ様の御実家のロズモンド家の御当主はどこか肩身が狭そうだ。

「ロレッタ嬢。」

噂の王太子、ジョセファン様がいらっしゃった。キラキラの金の御髪にエメラルドのような緑の瞳の華やかな方。とっても美男子。若いご令嬢方が王太子妃になりたがる気持ちもわからなくはない。性格もとっても朗らかな方だ。

「ご機嫌麗しゅう。殿下。」

「ふふ。久しぶりだね。中々外に出られないものだから…本当に久しぶり。」

春の王宮での花苑会以来ですよ。警備上の関係、殿下は殆ど王宮から出ていらっしゃらないから。今日は何故だかご出席されているようだけれど。

「御身は尊きになれば、致し方なきことかと。」

「もっと気楽な立場がいいんだけどね。ロレッタ嬢はまた美しくなったのではない？」

「花盛りでありますれば。（訳：でしょ？）」

私も見た目はまあまあ美しいんですよ？色彩はありがちだけれど。アルトはもっと美しいし。ちょっと悔しい。アルトめ。男のくせにあんなに綺麗なんて反則だ。

「僕の噂は聞いた？次の婚約者はロレッタ嬢のような美しい令嬢がなってくれば、嬉しいのだけれど。」

「お戯れも度を過ぎれば誰も微笑まなくなりましたよ。（訳：寝言は寝て言え。）」

「本気なのけれど…」

「ほほほ。人には向き不向きがございますわ。（訳：やだ。）」

バーベナ様は会話の邪魔にならないようにさつさと引っ込んでしまっている。裏切り者め。ぺっ。

遠い昔、まだ子供の頃ジョセファン殿下が私のことを妻に迎えたいと指名したことがあったけど、その時も断ったんだよね。正直言語と態度の特殊極まりない私に王太子妃は荷が重い。他人に悪態つく嫌味っぽい王妃とか絶対無理でしょう？

ジョセファン様から熱心に口説かれていると横入りする声があった。

「ロレッタ嬢。つれないですね。私に顔を見せてくだらないなど。

」

アドヴァンス様だ。

黒髪に碧眼の麗しい方だ。優しい微笑みを浮かべていらっしやる。

アドヴァンス様は少し優男風の紳士。大仰なりアクションが時々芝居がかって見えることがある。

「私に会いたいとお思いでしたらご自分の足で歩いていらっしやいまし。」

「それは失礼。麗しのレディ。お会いできて光栄です。」

恭しく私の片手を取って甲に口付けた。芝居がかった仕草が本当に様になる。大人の色香馥々洩れである。生娘なら一発でノックアウトされそうな妖艶さ。私には効果ないけど。生娘じゃないし。アルトの方がすごかつ…な、なんでもない！なんでもない！

「アドヴァンス。失礼じゃないか。ロレッタ嬢は僕と話していたのだぞ。」

ジョセファン様がクレームを入れた。

「それは失礼、殿下。何分婚約者である麗しのロレッタ嬢しか目に入らなかったもので。」

「まあ。もう婚約者面ですの？随分と気がお早いですわ。（訳：やめてよー。まだ婚約するって言ってないじゃん！）」

いきなり婚約者を名乗られてぎょとした。その話本決まりじゃないから！私まだ婚約するって言ってない！勝手に外堀埋めようとするのは止めてくれないかな！？

アドヴァンス様は大仰に嘆いた。

「何故色好い返事を頂けないのでしょうか？こんなにも想っているのに。」

「アドヴァンス様は女性関係が大変華やかな方だと聞きましたわ。躊躇するのは当然ではなくて？」

「男性の生理現象です。他ならぬロレッタ嬢の弟御も同じ生理現象に基づく行動をとられたでしょう？」

「……アルトはきちんと責任を取るつもりでしたわ。（訳：遊ぶだけのあなたと一緒にしないでください。）」

ムツと不快感を覚える。アルトはちゃんと『運命の女性』って言うてくれたもん。アルトに正体を明かしたら手のひらを返されそうな気がしなくもないけれど。

「意外ですね。姉弟仲は良くないとお聞きしておりましたが。」

私がアルトを庇うのが意外なのだろう。確かに他所からは仲の悪い姉弟だと思われるし、悪態は沢山つく。アルトからも「大嫌い」と言われている。が、私は決してアルトのことを嫌いではないし、寧ろ好きだ。「嫌いだ」などと言ったことは一度たりともない。

「姉弟仲は良くありませんね。でもアルトが一方向的にわたくしを嫌悪しているだけですわ。（訳：私はアルトのこと嫌いじゃないもん。）」

嫌われるのは悲しいけどね。私はロレッタ語を上手に翻訳できる人  
としか仲良くなれないのよね。これ、もう癖になっちゃってるから。

「そのように仰られると不安になります。この国が義理の兄妹姉弟  
も結婚できなければ良いのに。」

ロレッタ語をきちんと翻訳できるアドヴァンス様が表情を曇らせた。  
ジヨセファン様も表情を曇らせている。二人ともアルトを『恋敵』  
として見ているようだ。

「私はアルトと結婚するつもりはないですわ。」

「向こうがどのように考えられているかはわからないでしょう？」

アルトが私と結婚したがる？ありえないっしょ。あんなに嫌われて  
るのに。

アドヴァンス様とジヨセファン様とお喋りした。ジヨセファン様は  
途中で令嬢に囲まれて離脱したけれど。

「ねえ、ロレッタ嬢。私は世界で一番あなたを好きですよ？」

アドヴァンス様が瞳に熱を乗せて囁いた。

それはきちんと格付けされている2番や3番がいるのかもしれない  
な…とちらりと思ってしまった。





## 第4話

帰りの馬車で、アルトとゴトゴト揺られた。馬車は4人掛けだが、私たち二人の向かい側には侍女が一人だけ座って、置物のように静かにしている。

「……姉上はアドヴァンス様だけでなく、ジョセファン様からもご求愛されたそうですね。」

もう知っているのか。社交界は情報の回りが早いところだよ。

「寝言ですわ。」

「本気かもしれませんよ。」

アルトは思いつめた表情だ。

「馬鹿も休み休みお言いなさい。ジョセファン殿下でしたら女性などより取り見取りですわ。」

「わからないよ!………あ、姉上はかわいいから……」

驚いてアルトを見ると赤くなつてそっぽを向いていた。

「あら、アルトもお世辞の一つも覚えましたのね。サルより進化しているのではなくて? (訳: 成長ぶりが嬉しいけど、ちょっと恥ずかしいです。)」

「……。」

アルトはそれっきり喋らなかった。

何だかアルトらしくない。アルトが私に向かって「可愛い」などというのは初めてではないだろうか。普段は口を開けば嫌味の応酬ばかりしていて、私を可愛いとか綺麗とか褒めてくれることはない。昔私に王家から婚約の話が舞い込んだ時もアルトに反対されなかった。あの時は結構酷い言われ方をして傷付いたもんだ。昔を思い出しながら二人で無言で馬車に揺られた。

\*\*\*

アフォか。後日王家から正式に婚約申し込み状が来た。お父様に書斎に呼ばれて「どう思う？」と尋ねられた。

「ご辞退してください。」

お父様に主張した。ジョセファン殿下のことは嫌いではないし、素敵な方だとは思いつけれど、王太子妃なんて絶対に御免だ。

「王家からのお願いだよ？なんて言って断るつもりだい？」

「『ロレッタは言語機能に不治の病を患っているので王太子妃は務まりかねます』とでもいえばよろしいでしょう。勅令ではありませんせんし、断れるはずですわ。」

お父様は肩を竦めた。勅命だったら断れなかったけど。王家としてもロレッタが欠陥令嬢であることは承知しているはずだから無理は言ってこないと思う。寧ろ今この話を出すことすらアホだと思うのだが。多分ジョセファン殿下のご意向なんだろうな。ということに察せられる。あの方は私のことがお気に入りだから。

「ではそのように返事しておくよ。」

お父様の書斎でお茶を飲む。ハーブティーか。妙に酸っぱい。お母様が美容に良いとか何とか言って購入しているやつだ。嫌いでもないけど好きでもない。赤っぽくて色は綺麗だけど。

「なあ、ロレッタちゃん。もし、アルトがロレッタちゃんと結婚したいって言ったらどうする？」

「ありえない妄想をするのは時間の無駄ではなくて？（訳：ありえないことだから考えたこともないよ。）」

「うーん…」

お父様は唸ってしまった。

アルトが私と結婚？ないない。ここんところでもないけど、私を見る度に毛虫でも見るかのような目をしていたアルトだよ？

「今度家族で、絵画展などに行くかい？」

「お父様も少しはましな時間の使い方を覚えたようですね。（訳：とっても楽しみですわ。）」

家族団欒は楽しみです。皆で絵画展！特に私は絵画鑑賞が趣味なので嬉しい。

\*\*\*

家族で馬車に乗って、ルポート画伯の絵画展覧会に来た。ルポート画伯は今画壇で最も旬とされている売れっ子画家だ。若手らしいけどその実力に疑いはない。

鮮やかな色彩が特徴的な幻想的な絵画たち。草原で笛を吹く少女が長い髪を風にたなびかせている絵が素敵。何とも言えない情緒がある。

「姉上。あちらに女神の誕生が描かれている絵がありましたよ。」

アルトが笑顔で話しかけてきた。アルトは最近私にもよく笑顔を向けるようになってきた。以前は私を見ただけで毛虫でも見たみたいな顔をしていたというのにどうい風風の吹きまわしだろう。嬉しくなくはないが少し戸惑っている。

「なら見てみましょう。」

薔薇の蕾から生まれた芳しき女神の絵が描かれていた。周囲を妖精たちが祝福するように踊っている。まるで淡い色彩を使って緻密に描かれている。

「まあまあですわね。（訳：すごく素敵！）」

「この薔薇の質感と言ったら。艶めかしく濡れているようではない？」

アルトが薔薇の花びらを褒め称えた。確かにしっとりと濡れたような質感が良く表現されているけれど…

「ここは女神の美しさ后感嘆する場面ですよ。」

私は微妙な顔だ。確かに女神を生み出した薔薇も美しいけれど、この絵の主体は女神でしかないと思うのだが。絶世の美女とも言えそうなお顔にプロポーション。局所に薄布がかかって隠されている。見るものすべてを魅了する絶世の美しさである。女神と言っても『愛と美の女神』であるフローティア様だろうし。この世で最も麗しいとされている方だ。

「女神は綺麗ですが、姉上の方がお美しいです。」

「まあ、急にお世辞を述べてきたりして、何かよからぬことでも企んでいるの？（訳：急に褒められると照れてしまうよ。）」

「ほ、本当に、綺麗です……」

アルトが頬を赤らめた。

な、なんだか本気っぽい反応に私も頬が紅潮するのを感じる。弟相手にドキドキしちゃダメ。私は自分を叱咤した。

「まあ当然でしょう。わたくしは常に上を目指す女性ですもの。（訳：もっと綺麗って言ってもらえるように頑張るね。）」

前向きな発言を試してみたつもりだが、傲慢な発言ととられるんだろうな……

お父様とお母様と合流して一緒に絵を鑑賞したり、一人で気に入った絵をじっくりと鑑賞してみたり。ルポート画伯は風景画も描くのね。海に沈む夕焼けの風景。茜と金を上手に使った雲の色彩がなんとも見事。うつとり見惚れてしまう。

不意に視線をずらすとアドヴァンス様にご婦人と腕を組んで絵画を鑑賞しているのが見えた。噂の未亡人様かしら。

「アドヴァンス様。」

呼びかけると吃驚した顔をされた。

「ロレッタ嬢。このようなところで会うとは奇遇ですね。」

「ええ、本当に奇遇。そちらのご婦人とは随分親密そうでしたわね。わたくしお邪魔してしまっただけみたい。」

棘のある口調で感想を述べた。私に求婚しておいて別の女性と腕を組んで絵画鑑賞ですか。

「誤解だよ。彼女は…紳士にとって嗜みのような存在だ。決して本気ではない。」

「そうですの。わたくしは紳士でなかったので存じ上げませんでしたわ。（訳：女性にその言い分が通ると思ってるの？）」

「ロレッタ嬢ももういい大人のレディでしょう？大人の嗜みには理解を示すものですよ。」

ぱちんとウィンクされた。

イラつとした。女性関係が華やかとは聞いていたけど、こんな感じなのか。目の当たりにすると腹立つわー。大人の嗜み？寝ぼけてんの？ただの浮気じゃん。

「そうですね。よくわかりましたわ。（訳：あなたと相容れないということがよくわかりました。）」

なんて、処女喪失している私の言い分ではないけれど。

「良かった。世界で一番ロレッタ嬢を愛しているよ。」

アドヴァンス様は恐らく私を『1番』愛してくれることだろう。そして2番や3番の女性をも愛するのだろう。大人の嗜みとして。結婚後もその調子だと思つとこの男との結婚は絶対にお断りだ。アドヴァンス様本人も美形だしちょっとお茶目で優しいところのある紳士ではあるけれど…ドラレク公爵家との縁も確かに美味しくはあるけれど、無理に結ばねばならぬほどうちは切羽詰まっていはいない。嫌なもんは嫌。選択肢があるならもつと別の人を選びたい。猶予はあと2年ある。まだ焦らなくて大丈夫。

私はお父様にお断りの返事をしてもらうよう手はずを整えた。



## 第5話

「何故なのです！ロレッタ嬢。」

婚約の申し込みを断ったので、夜会でアドヴァンス様に詰め寄られた。大仰な素振りで嘆き悲しんでいる。

「わたくしは大人の嗜みには理解を示さない女性なのですわ。婚後もその調子でしょうと見極めがついたのでご辞退させていただきますわ。」

ほほと笑った。浮気者はお呼びでないのよ。私は私だけを愛してくれる男性に嫁ぎたいです。

「このわたくしに求婚しておいて、他の女性とも関係を持つなどと舐めているのではなくて？わたくしはあなたの仰る『愛情』をしっかりと認識しましてよ。（訳：浮気者は嫌いです。）」

「ロレッタ嬢は思った以上に夢見がちなですね。」

アドヴァンス様は困った顔をした。聞き分けのない子供でも見るかのような態度に更にイラっとする。

「あら、乙女が結婚に夢を見てどこが悪いんですの？わたくしを手にするのに『一番』じゃ足りませんことよ？『唯一』でなくては。」

アドヴァンス様は私に熱心に言い寄る割に「今後はあなた以外との女性と結びません。」とは言わなかった。女遊びする気満々である。確かに私も純潔は失ってますけれど、それにしたって下半身にル―



ズな男って嫌ですね。アドヴァンス様は肩を竦めて私の前から去って行った。

会場でシャンパンを飲んでいると、ジョセフ様が近づいてきた。

「やあ、ロレッタ嬢。今日も美しいね。」

「ご機嫌麗しゅう、殿下。」

「婚約は断られてしまったけど、あなたが心変わりしてくれないかとアプローチしてきましたよ。」

「時間の浪費ですね。（訳：心変わりの予定はありません。）」

シャンパンを味わう。上品な泡が舌を撫でる。アルコール分は薄めなので酔い癖が出るほどではないだろう。

「ロレッタ嬢。以前よりあなたを好いておりました。この胸に咲く赤い薔薇をその白い指先で摘み取ってくださいませんか？」

「最後まで飼う予定のない犬に餌をやるつもりはありませんわ。（訳：責任とれないから無理です。）」

ジョセフ様は悲しそうな顔をした。多分ジョセフ様は浮気はなさらないタイプの男性だ。それはすごく好ましいけれど、王太子でさえなければね……その地位が私にとっては重すぎる。もしかしたらベアトリーチェ様にとっても重かったのかもしれない。そう思うとジョセフ様もお哀想だとは思っけれど。

「殿下は、私のどこを好いていらっしゃるの？」

「素直じゃない優しさが愛おしいと思っていますよ。ユニークで可愛く、また、魅力的な方だ。」

うーむ……

しっかりと私のことを見てくれてるんだよなあ……つくづく惜しい方。

「僕がせめて第二王子であればあなたも僕の手を取ってくださったかもしれないのにね。」

「仮定の話は無意味極まりますわ。」

「せめて今夜は一緒に踊ってください。」

「仕方ありませんわね。（訳：喜んで。）」

ジョセファン様と共に踊った。ジョセファン様はお素敵な男性で、確かに第二王子として、他所に家を建てるなら一考の余地あったな……と思った。

一曲踊り終わってジョセファン様は去って行った。彼もいつまでも手に入らない女性に拘ってられる立場ではないのだ。

私も顔はいくらか美しいので、男性には言い寄られる。何度も何度も違う男性と踊り明かした。

「ロレッタ嬢。お初にお目にかかります。ジークムント・エドウィンと申します。どうぞお見知りおきを。」

エドウィンというと伯爵家だな。頭の中の貴族名鑑をめくる。

「ロレッタ・シエルガムですわ。」

私は母の連れ子で、養子縁組もしていないのでダイナートル家の御令嬢ではない。シエルガム伯爵家の血筋のものという扱いである。父の家は父の不正で改易してしまったので、シエルガム伯爵家は母の実家だ。父は不正がバレたとき母に見苦しい言い訳をして母に愛想をつかされたのだ。父が私を引き取っても継がせる家はないので母に引き取られた。父のその後はわからない。元から優しい父ではなかったのだ、さほど愛着がない。私が自分のお父様と認めているのはミカルドお父様だけ。

ジークムント様は素晴らしく美しかった。浅黒い肌に銀の御髪をなさっている。ぱっちりとした翠の瞳はエメラルドの様。目鼻立ちがくっきりとしていて生きた宝石のようにきらきらとしている。美しく、そして少し野性的な、魅力ある男性。見た目は満点に格好良い。

「良ければ一曲。」

「光栄に思いなさい。相手をして差し上げるわ。（訳：喜んで。）」

一緒に踊るとジークムント様はぴかりと光るようなダンス上手だった。こちらをその気にさせるのがお上手だ。楽しくてすっかり高揚してしまった。

「ダンスはいかがでしたか？お姫様。」

ジークムント様が微笑まれた。

「まあまあ楽しめましたわ。（訳：すごく楽しかったです！）」  
「なら良かったです。少しお喋りいたしませんか？」

テラスに出て二人でお喋りした。月に照らされたロマンチックなテラス。

ジークムント様は素敵な殿方な上、ロレッタ語の翻訳もお上手だ。すぐく会話が弾む。

「ロレッタ嬢はアドヴァンス殿の求愛も、ジョセファン殿下も求愛も断ってしまわれたそうですね。誰か意中の方でも？」

私はぱやんと頭に浮かんだアルトの影を手早く片付けた。

「おりませんわ。」

「では、僕などいかがでしょう？」

うーん。

素敵な方だと思ったのは確かだけど…

「ちょっと顔の良い男性に言い寄られたからと言ってはいはい頷く安い女ではなくってよ。誠意をお見せなさい。（訳：ジークムント様は素敵な方ですが、少し考えさせてほしいです。そういうのはお互いをもっとよく知ってから…）」

「そうですね。」

まだお会いしたばかりの方だし即答は避けた。お互いをもっとよく知って、その上でジークムント様に恋い焦がれたら、その話はお受けしたいと思う。失礼ながら素行の調査などもさせていただきたいし。アドヴァンス様みたいなのは困るから。

ジークムント様は自宅で薔薇を育てるのを趣味とされているそうで、庭師に教わりながら四苦八苦しながら薔薇を育てているようだ。

私は絵画鑑賞などが趣味で、気に入った絵画をお父様にプレゼントしてもらっているという話をした。とても話が弾んで楽しい。

\*\*\*

アルトは機嫌が悪そうだ。帰りの馬車ではむっつりと黙っている。

「何を不機嫌にされてますの？一緒にいる私まで不機嫌がうつりそうですわ。（訳：何か嫌なことあったの？）」

「……姉上が易々と他の男性に尻尾を振るのが良くないのです。」

ジークムント様のことを仰ってるのかしら？

「何故、わたくしが尻尾を振りたいた殿方を弟如きに決められなくてはならないのかしら？わたくし、あなたのものではなくってよ。」  
「訳：おねーちゃんだって気になる人の一人くらいはできるのです。」

アルトは悔しそうな顔をした。アルトは最近情緒不安定な気がする。  
おねーちゃん心配です。

## 第6話

ジークムント様とは文のやり取りをしている。中々機知に富んだ文章を書かれる方で、やり取りが楽しい。因みに私は文章では例の言語の呪いが出ないので、随分と素直な文章を書いている。ジークムント様がご自分で丹精された薔薇の花を贈ってくださいだったときは、本当に嬉しくて舞い上がった。何度も何度も嬉しかったという喜びのメッセージを綴った。

アルトの方はハリエツト・シリエルという子爵家令嬢と良い仲間になったようだ、社交界では言われている。いつから仲が良いのかは知らないけれど、気付いたら仲良くなってたっぽい。家に帰ってアルトに絡む。

「ほほほ。『運命の女性』などと大口をたたいて、あっさり心変わりをなさったのね。やはり男性の『誓い』ほど信用ならないものはありませんわ。」

アルトがまともな女性に目を向けてくれるならそれに越したことはない、と思いつつ、心にどこか隙間風が差し込んでいる。

「……ハリエツト嬢はそういうものではありません……」

アルトはそつと目を伏せた。何だかその顔が大人びていて、アルトにそのような顔をさせたのがハリエツト様なのだと思うとミシリと胸が痛んだ。

いいもんね。私にはジークムント様がいらっしゃるし。お手紙では素敵な日常が生き生きと綴られ、ますます素敵な方だという印象が募った。

私は頻繁にジークムント様と文のやり取りをして浮かれている。この高揚する気持ちが恋かしら？なんて思いつつ。

「姉上こそ、よくおモテになりますね。」

「当り前でしょう？あなたが言うとお皮肉にしか聞こえませんかけどね。（訳：ありがとう。でもアルトの方がモテるでしょ。）」

美形だし、私と違って言語が呪われてないし。女の子にはモテモテなのを知ってるよ。せめてアルトが結婚するとき、小姑として家に残るのは遠慮したいなあ。私言動があれだからお嫁さんは嫌な思いすると思うし。つきつきチクチク胸が痛む。

\*\*\*

夜会でもアルトはハリエツト様をお傍に置いている。ハリエツト様は丸顔で、美人ではないが愛嬌のある方だ。気立ての良さは大変な評判で、彼女の性格に惚れこむ男性は多いと聞く。勿論女性からの人気も高い。男性も人を選ぶし、女性からの人気もからつきしな私とは大違いだ。

「何をご覧になっているのですか？」

ぼんやりとアルトとアルトの隣にいるハリエツト様を眺めていたら、ジークムント様に尋ねられた。

「目障りな存在が更に目障りになったので、目を引いてしまっただけですわ。（訳：気になっちゃうことが出来てしまったので。）」

アルトとハリエツト様の関係に横槍を入れるつもりなどない。むしろ仲睦まじげなのは歓迎している。ただアルトがああして夜会で私

を傍に置いてくれたことなどなかったなあ……とも思う。仲の良くない姉弟として有名だったものね。アルトは私の事よく思っていないし、ジークムント様はお父様の調査結果でも非の打ちどころのない貴公子であった。性格も良好。資産も潤沢。見ての通りの美青年。因みに22歳だそう。女性関係も清らかとまでは言わないが、目立つようなことはない。まさに理想の結婚相手。これを逃したらこれ以上の物件を探すのは難しかろう。私は頻繁に文のやり取りをして、お心を繋ぎとめている。夜会でも何度かお会いしているし。ダンスのある夜会ではまさにジークムント様の独壇場。誰よりも素敵に踊られる。

「どうです？一曲いかがですか？」

「悪くない提案ですわ。（訳：喜んで。）」

やはりジークムント様はダンス上手で気持ち良く一曲踊り終えた。一曲踊り終えた後そっと抱き締められた。とくんとくんと鼓動の聞こえそうな密着体勢。

「テラスへ行きましょう？」

誘われるがままテラスに出た。テラスはところどころに木を植えられ、コの字型に壁に囲まれた空間だった。夜空には大きな青白い月が出ている。

「ロレッタ嬢のお手紙は面白いですね。普段奇妙な言語を操るロレッタ嬢から想像できないくらい素直で……。」

「口調は癖ですわ。」

悪い癖だとは思いつけど直らないのなもの。性格が歪んでいると、大いに他人に誤解を与える態度だ。おかげで全然人脈がない。悲しい



くらい。アドヴァンス様くらい大人の男性からは可愛がられるんだけどね。

「本当のロレッタ嬢は素直で、前向きで、可愛い方だ。」

「褒めても何も出ませんわ。（訳：有難うございます。）」「

率直に褒められると照れちゃうなー…

ぽっかり浮かぶ月を見る。青白い月光が柔らかな光を注いでいる。

「月に照らされるあなたは一段と美しい。」

「月に照らされないわたくしは一段落ちるとでも仰いたいのか？（訳：いつでも綺麗って言うてくんなくやダ。）」「

ジークムント様は微笑んだ。

「失礼。あなたはいつでも最高に美しいですよ。」

ジークムント様は私を甘やかした。甘やかされるのは心地いい。何となく安定した気持ちを得るのだけれど、この安心感も恋なのかしら？

「麗しい…愛しいロレッタ嬢…」

ジークムント様は壁際に私を追い込んでそつと頬に手を滑らせた。ゆっくりと近づいてくる唇。私にキスされるおつもりだ…身が竦む。

「いやっ。」

拒むと一瞬ジークムント様が止まった。

「怖がらないで…?」

「いや…いやなの…」

怯えて泣いた。何故だかわからないけど、すごく嫌なのだ。ジークムント様にキスされたくない。

「姉上が嫌がっています。離れてください。」

いつの間にかやってきていたアルトがジークムント様を引きはがした。ジークムント様は抵抗するでもなく、すぐに私から離れた。

「ロレッタ嬢。すみません。泣かせるつもりはなかったのです。」

ジークムント様は悲しそうな顔をされると一礼して去って行った。

「あと…」

「……。」

アルトは怖い顔で私を壁に押しつけると、無理矢理唇を奪った。ねっとり濃厚で激しいキス。あうあう舌入れられてるうつ…心臓が早鐘を打つ。

たっぷり唇を貪って、私をとろとろかして、アルトは離れた。

「今夜はもう帰りましょう。」

「……そうね。」

私も心が乱れて夜会の気分ではない。

この人こそと思ったジークムント様を拒んでしまったことも、素顔のままアルトに口付けられたことも混乱している。

\*\*\*

馬車の中でアルトは無言だった。私はさっきのキスがどういう意図を持ってされたものなのかわからずに困惑している。

「アルト…?」

「話しかけないでください、姉上。自己嫌悪で死にそうなのです。」

「……。」

勢いあまって大嫌いな姉などにキスしてしまつて自己嫌悪に陥っているという意味だろうか。なんだかとても凹んだ。

## 第7話

ジークムント様からはお手紙もなく、接触も無くなった。逃した魚は大きいと思うものの、キスは無理だと思ったのだ。多分それ以上はもつと無理だと思う。夫婦としてやっていくのは難しかろう。

夜会で晴れてフリー状態の私はそれなりに美しいので、男性方は程々に寄ってくる。ロレッタ語を上手く翻訳できない男性方は私の辛口表現にすごすごと立ち去ってしまうのだが。

「ロレッタ嬢は詩歌の嗜みがおありですか？」

「まあ失礼な。無いと思つてらっしゃるの？（訳：勿論ありますわ）」

「

「そのサファイアの首飾りは素敵ですね。瞳の色とも合っていて、よくお似合いです。」

「当り前でしょう？ 似合わない装飾品を身につける乙女がいるの？」

（訳：ちゃんとお洒落したんですのよ？ かわいい？）

上から目線の暴言が癖なので、男性たちは引いているようだ。いくら美しくても性格が歪んでると取られて不思議ではない。男性たちがさざ波のように引いて行くのはわかる。わかるがこの癖は簡単に治りそうにない。お酒が入れば随分素直になれるのだけれど、酔っぱらつてお持ち帰りされる展開は避けたい。懲りた。

「ご機嫌うるわしゅう。ロレッタ様。」

「麗しいように見えるのならあなたの目は節穴よ。」

バーベナ様がいらっしゃった。素晴らしく素敵なジークムント様を受け入れられなかった自分に嫌気がさしているし、私に集ってくる

男性がみな「この令嬢は止めておこう…」とばかりにそそくさと逃げだすのを見て、到底愉快的気分にはなれない。

「ロレッタ様はこんなに面白くてチャージングなご令嬢だつて言うのに、世の男性の目こそ節穴だわ。でもジョセフ様とアドヴァンス様は勿体無かつたのではなくて？きちんとロレッタ語を理解できる希少な殿方でしたのに。」

「わたくし、自分を安売りするつもりはありませんの。（訳：コミユニケーション取れば誰でもいいわけじゃないよ。）」「  
「ジークムント様は？」

「……。」

ジークムント様以上の物件がないこともわかっていたので、何とも言えない。どうしてキス…嫌だつたんだろ。アルトとは嫌じゃなかったのに。思い出してもがっくりしてしまう。ジークムント様の事とっても素敵だと思ったのに…いざとなったら「無理！」って思ってしまったのだよ。

「ふふ。ロレッタ様は早く自分のお心に正直になるべきですわ。」  
「？」

楽しくお喋りした。バーベナ様はそろそろ意中の方にプロポーズされる予感がする…と仰っていた。わくわくしているようだ。あと、アルトの周囲に再びご令嬢が待るようになったと。

確かに会場でアルトを見ると沢山のご令嬢方に囲まれている。その割にはあまり嬉しそうではない…というか憂鬱そうな顔をしている。ハリエツト様は今日はご一緒ではない模様。随分と憂鬱そうだけど、ハリエツト様がご一緒ではないから切ない思いをしているのかしら…そう思うとツキリと胸が痛む。

「アルト様はまだ例の女性を探していらっしゃいますの？」

バーベナ様に尋ねられた。

「最近を探すことはしていないようですわ。熱病の覚めるのが早かったこと。」

ちよつと皮肉気な言いざまになってしまふ。別にずっと執着して探し続けて欲しかったわけではないし、他に目を向けた方がアルトも幸せになれるだろうけど…ちよつとがっかりです。アルトも初めてだったようだけど、私だって初めてだったのに。容易く忘れられるくらいの想いだったのだと思うと複雑だ。

「最近アルト様もロレッタ様と仲がおよろしいのではなくて？」

そうかな？そんな気もするけど…

私にもよく笑いかけてくれるし、時々「可愛いです」って褒めてもくれる。アルトからの視線に以前のような棘を感じなくなった。

「もしかして、ロレッタ語に目覚めたのではなくて？」

「存じ上げませんわ。」

ツンとそっぽを向いたのでバーベナ様に笑われてしまった。喜んでるのが隠せていなかったらしい。

アルトがロレッタ語をちゃんと理解できるようになって『仲良し姉弟』になれたらいいだろうなあ。小さい頃から、アルトと仲良くなれたらなあ…というのは私の胸を締め付ける切ない願いだったから。

「本当にロレッタ様はアルト様が大好きですものね。」

「こ、誤解を招く言い方はおやめくださいまし。」

だ、大好きだなんて…そりゃあ好きだけど、社交界でおかしな噂を立てられるのは困るよ！

\*\*\*

今回も無事アルトと馬車で自宅へ戻った。アルトは少しぼうつとしている。お茶を入れてもらったのに口をつけず、カップを眺めている。

「気分でも優れませんの？」

「別に、そういうわけではないです。」

心配になって聞いてみたが、そういうわけではないらしい。アルトは思い出したかのようにカップの中身を一口飲んだ。

「今日もあんなに綺麗なご令嬢に囲まれていたのに笑顔一つ見せずに憂鬱なため息ばかりついて。失礼ではなくて？（訳：失礼な態度を取っちゃうほど苦しい気持ちを味わっているの？）」

「そういうわけではないですが…恋って難しいですね。」

アルトは困ったように微笑んだ。ずきりと胸が痛む。

「ハリエツト様は今日とは一緒ではなかったものね。煮え切らない態度をとるから愛想をつかされたのではなくて？（訳：男ならドーンとぶつかるべきだとおねーちゃんは思うのだよ。）」

ハリエツト様に本気で恋煩いしているというのならおねーちゃんは応援します。おねーちゃんにできることなんて精々お祈りするくらいだけだね。ハリエツト様は素敵な方だと聞くし。

アルトは苦笑した。

「ハリエツト嬢はそういった相手ではありませんよ。…彼女には少々恋の相談に乗っていただいていただけです。」

「恋…」

眉を顰める。

もしかと思うが、すっかり心変わりしたのだとばかり思っていたのだが、アルトはまだ例の仮面舞踏会の一夜の契りが忘れられないのだろうか。私にとっても一生記憶に残ることだけど、アルトは運命まで感じたようだし。いけないことだとわかつているのに少しだけ喜んでいる自分がいる。こんな気持ちを抱いてはダメ。

「アルト、無様に捨てられた分際で、まだ仮面舞踏会のご令嬢に未練を引きずっているんですの？（訳：まだ傷付いてる？）」

おねーちゃんトラウマ植え付けちゃった？御免なさいって言いたいけど言えない…。大嫌いな姉に童貞食われたと知ったらアルトが傷つくから…。って最近はあるまり嫌われてないのか？ならいいのか？あれ？おねーちゃんちよつと混乱してきたぞ。

アルトは酷く苦悩した顔をした。

「いえ…引きずってはいるのですが…正直な話、酔っぱらってしなだれかかってくるご令嬢などごまんといいます。僕が酔って甘えてくる彼女を介抱しようと思ったのは彼女の姿や声が姉上に似ていたからなのです。」

「は？」

思いもよらないことを言われて、間抜けな声を出してしまう。  
私に似ていたから？何故それで進んで介抱しようなどと？



「可愛く甘えてくる彼女を見て、姉上もこんな風に甘えてくれたら……と思つたら、ムラムラしてしまつて、彼女を抱きながら姉上が僕の腕の中でこんな風に甘えてよがつてくれたらつて思つたらすごく興奮して……起きてすぐはその高揚感に満たされて、彼女こそ運命の女性に違いない……つて舞い上がったんですけど、よくよく考えるとただ身代わりをしていただけなのかもしれないつて思つてしまつて……もし真正正銘の彼女が僕の目の前に現れたら、きっと僕は罪悪感に飲み込まれていたと思います。」

アルトは困つたように微笑んだ。

「一旦自覚すると焦がれるように恋情が膨れ上がつてしまつて……姉上がジークムント殿にキスされそうになつたのを見た時は嫉妬で我を忘れて、無理矢理姉上にキスなどしてしまつて……。キスを嫌がつて泣く姉上を目にしているのに、無理矢理に奪つたと思うと最低だと思つて、自己嫌悪してしまいました。」

「アルトは姉に劣情を抱く変態だつたのね。（訳：急に弟に性的対象として見てたつて言われてもおねーちゃん困ります。）」

「軽蔑した？気持ち悪い？僕はどうやら姉上のことが好きで好きで仕方がないみたいなんだ。」

「……。」

そ、そりゃあ私だつてアルトは結構好きだし、酔つて体を繋いじやつたつてわかつた後「孕んでたらどうしよう」つて冷や冷やはしたけど嫌悪感なんてこれぼつちもなかった。好きかと言えば好きなんだけど……アルトに嫌われていると思つていたから、無意識に防衛線張つてたというか、そういう対象として見ないようにしてたつてところあるから。

「ねえ。姉上。僕を選んでくださいませんか？もう身代わりに他の誰かを抱いたりしない。姉上だけと誓うから。好きなんです。優しいところも、素直じゃないところも。可愛いところも、甘い声も。だから僕のものになってください。」

アルトの潤んだ瞳が私に向けられる。きゅんっとな胸が高鳴る。私が胸の奥に封じ込めていた箱がパカリと開いた。ドキドキきゅんきゅんアルトへの恋情で渦巻いている。

「嫌よ。」

端的に述べるとアルトの顔が暗くなった。

「『僕のものになつて』？何様のつもりよ？あんたが『私のもの』になりなさいよ！一生！よそ見したら一生許しません事よ。（訳：一生私のこと好きでいてね。浮気しちゃうだよ？）」

アルトの顔がみるみる明るくなって。「うん！うん！」と何度も頷いている。尻尾を振っているような幻影さえ見える。

「でもさ、姉上。…僕の妄念を取り除くために一つお願いしたい。」  
「何よ？」

「姉上。スカートをまくって股を開いて見せてくれませんか？」

私が仮面の女である目印を見つけたアルトの反応は皆様の想像にお任せする。

## 第7話（後書き）

本編終了。おまけもあります。

おまけはかなり長いです。

おまけも本編というか、おまけを読まないとその物語の全貌は見えないようなものなので、是非、おまけも読んでいってくださいませ。

## 両親への報告

意地っ張りな告白も済み、晴れて恋仲となった私たち。次なる縁談を持ち込まれてはたまらないので、さつさと両親に事と次第を報告するとした。

私とアルトが結婚したいと申し込んだときはお父様もお母様も生ぬるーい目で見えてきた。

「やっとアルトも恋の自覚を持ったのか。どこからどう見てもロレッタちゃんに骨の髄からべた惚れなくせになにかとツンケンして、俺は冷や冷やだったよ。」

お父様が笑った。べた惚れ…全然気づかなかったよ。寧ろ嫌われてると思ってた。「大嫌い」って言われたし。

「私もロレッタちゃんはアルト君が大好きで大好きで仕方ないのに、上手に態度に出せなくて誤解されて冷や冷やしたわあ…」

お母様もコロコロと笑った。

私たちの恋愛事情は両親の知るところであつたらしい。あの私を愛してくれているお父様が私を養子縁組しなかったのもそのへんの理由だろう。一度親子として養子縁組してしまうと姉弟は結婚できないから。

「おまけにアルトが運命の女性探しなんて始めちゃって。候補が茶色の髪にサファイアブルーの瞳。美しい口元。もう誰を重ねて見ていたのかまるわかりだったよ。」

お父様が生ぬるく笑った。

「えと…その仮面の女性は姉上でした。」

アルトが恥ずかしそうに述べた。自分の姉と性行為済みだもんね。しかも運命を感じるような濃厚えっち。両親に報告するのはちょっと恥ずかしいよね。

「まあ。そうなの？」

「はい。でも僕は童貞を捧げたから姉上を妻にしたいのではなく、姉上を好きだから妻にしたいのです。」

おおぅ…ストレートな告白に頬が染まる。アルトはなんて言うか私に対して随分丸くなったように思う。等身大の少年アルトも可愛くはあるけど、優しい男性は勿論好きです。特に嫌われてるとばかり思ってたから嬉しさひとしお。

「ロレッタちゃんはどう思っているの？」

「どうしても、と乞われるなら妻になっても良いですわ。（訳：激しく求められて嬉しいのでお嫁さんになりたいです。）」

「そう。たまにはちゃんと好きって言ってあげなきゃダメよ？」

「嫌いじゃないですわ。（訳：大好きです。）」

お母様は困ったような顔をした。どうして私の口からは素直じゃない言葉ばかり出てくるんだろうなあ。溜息が出ちゃうよ。私だってもっと素直に「アルトが大好きだよ」って言いたいのに。

「ロレッタちゃんはちょっと独特の態度をとるけど、アルト君大丈夫？」

「はい。僕も姉上が何を仰っているのかなんともなくわかるようになる

ってきましたので。」

アルトはいつの間にやらロレッタ語の翻訳が出来るようになっていたらしい。やはりコミュニケーションは偉大だね。私は口語言葉に悪癖がついてるから他人には誤解されがち。言いたいことを汲んでくれる相手とはすごく仲良くなれるんだけど。

「なら良かったわ。悪癖ではあるけれど『ロレッタちゃんに欠かさないスパイス』ですものね。」

「はい。酔っぱらって可愛く甘える姿もキュンときますが、意地の悪い態度のくせして本心は可愛い乙女というギャップは最高に可愛らしいです。こんな可愛いギャップに気づかなかったただなんて人生損してました。」

アルトの惚気も絶好調だ。うつとりと父母に私の可愛らしさを述べている。

「アルト。耳が曲がりそうな臭いことばかり言っていると口が腐るわよ。（訳：恥ずかしいから惚気ないで。）」

「今まで姉上には酷いことばかりを言っていたので、これからは甘いことを沢山囁きたいです。耳にお砂糖を詰める覚悟をしてください。」

「……ばか。」

とりあえず婚約の報告だけして結婚の予定を立てることとなった。今から計画を立て、告知して、来年の秋頃挙式してはどうかという話になった。異論はない。結婚準備は忙しいものとなるだろう。

「そうそう。アルト君たちはもう初夜は前倒ししたみたいだけど、結婚式が終わるまでは禁欲生活してね。花嫁は赤ちゃんを身籠ると

婚礼衣装のサイズやデザインが選択できなくなるから。」

「そんな！」

アルトがショックを受けた顔をした。若いもんねえ。えっちなことは好きだよ。おねーちゃんもえっちなことは嫌いではないけど…ウェディングドレスはマーメイドラインが良いです。ひらひらっつてたっぷりトレーンがあつて。長いマリアヴェールをつけて。一生思い出になる式だから理想のドレスが着たいなあ。アルトが思わず惚れ直してくれるような。

「1年の我慢だよ。一生の思い出に残る式になるのだから獣欲くらい我慢なさい。」

お父様に宥められてアルトはしょんぼりしてしまった。お初にえっちな感触からするとアルトって結構絶倫気味な感じだしね。

「アルトはわたくしの身体だけが目当てですか？」

「そんなことあるわけないよ！姉上の全てを愛しています。」

「なら、我慢なさい。」

アルトは恋が成就して少し浮かれているようだ。私も嬉しいけれど。

\*\*\*

居間でまったりとお茶。例のやたら酸っぱいハーブティーに蜂蜜を足していただく。アルトも向かいのソファで同じものを口にして顔を顰めている。あまり好きな味ではないようだ。

「姉上。このお茶、色は綺麗だけど、すごく酸っぱい。」

「おこちゃま舌のアルトにはまだ早い味だったかもしれないですわ

ね。おほほ。でも美容には良いらしいですわ。（訳：好き嫌い別れる味だよね。でもおねーちゃんは綺麗になれるように頑張ってます。）

私はもう一口ハーブティーを飲んだ。何とも言えない酸味と蜂蜜のほのかな甘みを感じる。香りは素敵だ。いい香り。

「そう言えば、わたくしはこの通りの悪癖を所持しているので、つきりアルトには大嫌いだと思われると思ってましたのですが、アルトはいつから私のことを想っていたのですか？」

「うーん…そうだなあ。」

アルトは回想を語り始めた。



## アルトの回想1

僕が初めて姉上に合ったのは6歳の頃だ。父上が再婚される女性の連れ子ということだった。

姉上は美しい少女だった。8歳と聞いていたが、緩く波打つ茶色い髪にぱっちりとした大きなサファイアのような瞳。配色はこの国で最も多いありふれた色合いだが、ツンとした小ぶりな鼻もぷっくりとした柔らかなような薔薇色の唇も、人形のように整った美しい少女。僕は一瞬で心奪われた。こんな美しい人が僕の姉になる……そう思っただけで甘い気持ちで胸がいっぱいになった。思えば一目惚れの初恋だったのだろう。

姉はその可憐な唇を開くと僕に向かってこう言った。

「まあ、なんて奇妙な瞳の色なのでしょう。とっても目障りだね。

（訳：変わった瞳をしているのね。綺麗でよく目立つわ。）」

侮蔑に満ちた口調だった。

パリンと僕の初恋が会って数秒で砕け散る音が聞こえた。このオッドアイは僕にとってコンプレックスの一つだった。とりたてて醜いと感じたことはないが、周囲にこんな瞳をした人間など居ないし、どこへ行ってもヒソヒソくすくす言われる。もしかしたら好意的な意見もあったのかもしれないが、ヒソヒソやられては傷付くだけだ。一番触れられたくないところを面と向かって悪し様に言われて傷付いた。

父上と新しい母上は愛し合っているし、もうこの少女が僕の姉になつてしまうのは確定しているのだが、顔を見る度、思い出して傷付くので出来れば近寄りたくない気持ちだ。

なのにもかかわらず、姉上は僕を見る度寄ってきて暴言を吐く。

「今日も一日書庫で本を読んでいたのですってね？将来軟弱になること請け合いですわ。（訳：読書もいいけれど、体も動かさないと健康に悪いですわよ？）」

嫌味っぱくネチネチと僕を甚振る。

「放っておいてください。きちんと運動もします。」

「あらあら。運動するのは良いですが、筋肉痛で泣かないでくださいましね。みつともないから。（訳：運動頑張ってね。でも根を詰めすぎちゃダメよ？）」

「姉上こそ人のことを言えるのですか？」

「ほほほ。わたくしは常に精進してますことよ。上に立つものとして。（訳：アルトのお姉ちゃんとして恥ずかしくないよう頑張ってるよ！）」

姉は宣言通り勉強や運動に手を抜かない人なので僕は悔しい気持ちになる。成績の方は家庭教師にもよく褒められているのを知っている。家庭教師は性格の方は評価しないらしく「ロレッタお嬢様の様になってはいけませんよ。」と僕に言ってくる。僕は姉上が大嫌いだが、面と向かって悪く言われるのもいい気持がなくて「姉上を悪く言うな！」と家庭教師に抗議した。

「あら、お父様。アルコールの飲み過ぎで中年太りになったのではなくて？（訳：飲み過ぎは体に悪いですよ。）」

「そうかもしれないあ。気をつけよう。」

父上も母上も姉上が何を言ってもにこにここと聞き流している。揃って食べる夕食時も姉上の暴言は止まらない。

「ロレッタちゃん、新しい枕にしたでしょう？具合はどう？」

「まあまあですわね。（訳：とってもいいですわ。）」

職人が精魂込めた最高作品であることを知っている僕としては「まあまあ」などと評する姉上に悪感情が湧く。

「アルト。眉間にしわが寄ってましてよ。とても不細工ですわ。（訳：可愛い顔が台無しだよ。）」

姉上に指摘されたが、ぷいっとそっぽを向いて食事をとった。ほんとに厭味つたらしい性格をしている。黙っていれば見惚れるほどに美しいのに。

食後父上と二人きりになる。

「父上、姉上は躰がなっていないのではないですか？」

姉上の実母たる母上には言えずに、父上に言うと父上は笑った。

「ロレッタちゃんは変わってるけれど、すごくいい子だ。あの口調も慣れると味があつていいしな。なあに。ロレッタちゃんは理解者を得られれば強いだろうよ。」

父上は笑って相手にしてくれなかった。

「でも……姉上は性格が悪いです。」

僕は口を尖らせた。口を開けば嫌味ばかり。特に家族の中でも僕のことが一際嫌いみたいで、殊更ネチネチと嫌味を言う。あんなのじやきつと嫁の貰い手がないに違いない。

「……………今日、デザートにブルーベリーたっぷりのジュレが出たのは何故だと思う？」

父上が唐突に言った。

「？」

何故？よくわからなかった。食事のメニューは料理人に一任されているはずだが。

「お前が本ばかり読んでいるから、目が疲れているのではないかと料理人に特別に作らせたからだ。ロレッタちゃんが。」

信じられないような気持ちでそれを聞いていた。あの姉上が？僕の為に？ありえない気がしてならない。

「お前は、もうちょっと大人にならないとロレッタちゃんの『味』はわからないだろうな。」

父上に言われて苦い顔になる。何だかまるで僕ばかり子供で、僕ばかり姉上を知らないようで、とても面白くない。

気に入らないなら相手にしなければいいというのはわかっているのだが『気になる存在』なので無視も出来ず、もどかしい。

「姉上はどうして、そう僕に突っかけてくるのですか。」

そう聞くと姉上は必ず「目障りだからよ。（訳：気になっちゃうんだもん）」と言う。きつととても僕のことを嫌いなのだと思う。僕はその返答を聞いたびにずきりと胸が痛い。姉上なんて大嫌いだ。



## アルトの回想2

8歳になった。姉上は10歳。相変わらず黙っていれば人形のように美しいのに、口を開けば嫌味しか言わない。

姉上に口煩く嫌味を言われる日々が続き、ある日僕の堪忍袋の緒が切れた。

「姉上は口煩いです。そんなに僕が気に入らないなら放っておけばよいでしょう。そのように人を罵るなど性格が悪いです。姉上なんて、大嫌いです!!」

癪癪を爆発させて叫んだ。僕が面と向かって姉上に「大嫌い」だと言うのは初めてだ。自分で放った刃のはずなのに、その言葉は僕の胸を抉った。

姉上はガラス玉のような冷たい目で僕を見た。

「……知ってるわ。そんなこと。」

言い返すでなく感情を高ぶらせることもなく、冷たい声を出された。冷静な反応を返されると、突き放された気がして悲しくて泣いてしまった。姉上は僕のことを嫌いなのだ。嫌いだからネチネチ甚振るように文句を言うし、僕に「大嫌い」と言われても冷たい反応をするのだ。僕は姉上に傷付いて泣いて欲しかった。『僕』という存在に強く心動かされて欲しかった。

姉上は泣くでも喚くでも嫌味を言うでもなく、スタスタと自室に戻ってしまった。

姉上は夕食に出てこなかった。

「ロレッタちゃんどうしたんだ？」

父上が不思議そうな顔をした。姉上は健康的な人だから普段食事はきちんとする。

「なんだか気分が優れないみたい。」

母上が心配そうな声で言った。もしかなくても僕が「大嫌い」と言っただらうか？僕の胸に湧き上がるのは『罪悪感』と『歓喜』。僕に嫌いだと言われて姉上が傷付いたのだと思うと嬉しかった。父上と母上におずおずと姉上と喧嘩して「大嫌い」と言った旨を白した。父上はあちゃーという顔で天を仰いだ。

「そりゃあ……ショックだったろうな。ロレッタちゃん。」

「仕方ないですわ。あの子は人には理解されづらい子ですから。」

「お前も惜しいことしたよ、アルト。」

何だか同情された。どうして同情されたのだろう。

姉上は3日間姿を見せなかった。3日経った後は普通に姿を見せて僕に嫌味を言っただけ、なんだか前ほど嫌味にも感情が込められていない気がして、僕を不安にさせた。何だか大きな間違いを犯したのではないだろうかという思いが胸中を渦巻く。

姉上が僕に絡んでくる頻度は少し減った。代わりに姉上は他に友人を作るようになった。姉上が親しくなったのはジョセファン殿下。言わずと知れたこの国の王太子様だ。姉上は7日に1度くらいはジョセファン殿下に会いに行く。僕はジョセファン殿下が大嫌いだ。姉上に暴言を吐かれてもニコニコして、事あるごとに「綺麗だ」「可愛い」と褒める。僕だって姉上のことを綺麗だと思っているのに、姉上は僕の顔を見る度に嫌味を言うから、そんなことは言えないのだ。易々と姉上を褒め称えて、時には手を握ったりするジョセファ

ン殿下が大嫌いだ。

そんなある日父上が言った。

「ジョセファン殿下がロレッタちゃんを王太子妃に望んでるらしいぞ。」

とても嫌な気持ちになった。

「まあ、周囲の方は？」

「反対しているみたいだ。ロレッタちゃんは態度が独特だからな。王はジョセファン殿下がどうしてもというなら……という感じでうちにどうか聞いてきている。」

姉上がお嫁に行かれる…僕の心は真っ黒に染まった。

「ロレッタちゃんはどうしたいの？」

母上が姉上に尋ねる。

「そうですね…僕は反対です。」

姉上の発言を聞く前に発言を被せた。

「姉上のように傲慢で、性格が悪く、品性下劣な女性が王太子妃については王家の品位が疑われます。我が家の恥を王家に押し付けるなど、賛成できません。」

強い口調で姉上を貶めた。

姉上は「そうね。…あなたに言われるまでもないことよ。」と言って、婚約の打診を断ると自室に引っ込んでしまった。僕は初めて父



上に殴られた。

「どうして殴られたかわかるか？」

「……姉上の悪口を言ったから。」

「何故あんなことを言った？」

「……。」

答えられなかった。姉上がお嫁に行かれるのだと思ったら黒い激情が走って、考える前に口に出していた。何故あんなことを言ってしまったのかわからない。確かに姉上の性格はお世辞にも良いとは言えないけれど、品性下劣とは言い過ぎなことくらい僕にもわかる。でも、どうしても姉上をお嫁に出したくなかったのだ。

「それを自覚しないとお前は絶対に後悔する。俺はお前が馬鹿だから殴っただけだ。」

父上に冷たく突き放された。

わからない。わからない。姉上に関する事になると僕は冷静になれなくなる。大嫌いなものだから放っておけばいいと思うのに、そうさせてくれない。僕の心を惑わせる姉上をより一層憎んだ。

結局王家との話は流れた。ジョセファン殿下はベアトリーチエ嬢と婚約を結ばれて、僕の心にはささやかな平穏が訪れた。

姉上はベアトリーチエ嬢に気を使ったのかジョセファン殿下に会いに行かなくなった。自室に籠られることが多くなり、僕とも前ほど顔を合わせない。顔を合わせれば嫌味を言うのは変わらないけど、なんだか心が空虚だ。

ああ、姉上なんて大嫌いだ、大嫌いだ、大嫌いだ。……でも顔が見たい。

自分の心がままならずもどかしい。



### アルトの回想3

僕と姉上は険悪な姉弟関係として人の口に上るようになった。僕はそれが酷く憂鬱だ。姉上に嫌われているだけでも気が重いのに、年頃の子供たちが僕の周囲に募ると皆こぞって姉上の悪口を言うのだ。

「ロレッタ様って性格がよろしくありませんわよね。」

「そうそう。会えば嫌味ばかり仰られて。アルト様も嫌な思いをされているのではない？」

「ええ、まあ…」

曖昧に微笑んだ。姉上が僕のことをお嫌いなのは疑いようがないけれど、姉上にだって優しい面の一つや二つあるのだ。誕生日には枕元に「誕生日おめでとう」と一言だけ添えられたカードとプレゼントが置いてあったし。僕がちょっと良いなと思っていた最新モデルのペンと綺麗なガラス細工のインク壺だった。寝癖をつけていると「なんてみつともないんでしょう。」と嫌味は言うけど、さっと櫛で直してくれたりする。

でもそんなことを言って、みんなか姉上と仲良くなってしまったらとても面白くなって、庇うことも出来ない。

「やっぱり！アルト様可哀想」。あんな意地悪なお姉様がいるだなんて。」

みんなで楽しそうに姉上の悪口を言い合っているのを見るとむかむかと言いたいような不快感に襲われる。

姉上のことなど何も知らないくせに。知ってほしくもないけど。

姉上は僕が自分の悪口を言っている集団の中心にいることを知って

いらつしやる。けれど何も言わない。姉上は面と向かって嫌味ばかり言うくせに「自分を悪く言われたから」という理由でお怒りになることはあまりない。自分に対する悪評についてはややクールな態度を取られる。

同年代のご子息、ご令嬢には甚だしく人気のない姉上だが、もつと年上の紳士からはとても人気がある。「可愛い」「可愛い」と愛でられている。何だかそれもとて面白くなっていい気がしない。思えば父上も「ロレッタちゃんは可愛いなあ。」とよくよく仰って愛でている。その割に養子縁組はなさらないのだけれど。

\*\*\*

子供たちが集まると姉上の悪口を言う。そのルーティーンに楔を入れるものが現れた。

「僕は、ロレッタ嬢のこと結構好きだな。素直じゃないけど気持ち  
が優しくて。綺麗で可愛いし。」

屈託なく笑ったのはマーティン・プロイスという子爵子息。発言したが最後、マーティンは僕のグループからつるし上げを食らってしまった。

「マーティン様趣味が悪いんじゃない？」

「あんなに嫌味っぱい人のどこが気持ちの優しい人ですか？」

「ロレッタ嬢は素直じゃないんだよ。何を仰りたいのかよくよく考えて差し上げると、いつも可愛らしいことばかりを仰っているよ。」

マーティンはこの大人数に囲まれても臆することなく姉上を擁護した。しかも心から姉上を可愛いと思っている様子。僕の心は波だつ

た。

「それって都合のいい妄想ではない？」

「過大評価だよ。」

マーティンは変わり者ということとで僕のグループから排斥された。それはいいのだが、彼はあろうことが姉上に近付いた。

「ロレッタ嬢。今日も可愛いね。」

などと笑顔で声をかけるのだ。ものすごく不愉快である。姉上もツツとすまして「当然でしょ。（訳：ありがとう。）」などと言うが悪い気はしていないようなのだ。二人で仲良くお茶を楽しんだり、時には笑い合ったりしている。姉上があんなに楽しそうに笑う様子など、僕の前では到底見せぬ姿で、僕は衝撃を隠せなかった。まるで小さな恋人たちのように親しげに振舞う様子を見て、僕は心穏やかではない。

「ロレッタ嬢。つまらないものだけれどプレゼント。」

小さなピンク色のブーケなどを渡している。

「悪くない選択ですわ。（訳：素敵です。とても嬉しいです。）」

「ふふ。花が似合うね。」

「……。」

姉上は少し赤くなった。ほんの少し嬉しいような恥ずかしいような乙女らしい反応だ。僕の前では決して見せぬお姿。僕はもう居ても立っても居られない気持ちになった。子供の集まりの後、マーティンに声をかけた。

「ま、マーティン…！」

マーティンが振り返った。

「やあ。アルト。どうかしたかい？」

「そ、その……」

なんて言っていていいか言葉に詰まった。マーティンはじつと黙って待っていてくれた。

「その…姉上に近付かないでほしいんだ…」

僕の気持ちをストレートに伝えてみた。

「何故？」

マーティンは優しく尋ねた。

「わ、わかんないけど…マーティンが姉上と親しくすると、とても嫌な気分なんだ。すっごくすっごく嫌なんだ…だから、もう近づかないでほしい。」

マーティンは笑い出した。

「あははっ。アルトは自覚ないんだね。君が一生懸命お願いするから僕は距離を置いてもいいけどね。アルト。君がきちんと自覚して行動しない限り……君の姉上は誰かに望まれて、どこかの誰かの妻になるんだよ？」

口にすごく苦いものを含まされた気がした。

「『どうして嫌だと思ったのか』きちんと考えた方が良いよ。」

マーティンはそう言うといらひら手を振って去って行った。

マーティンは姉上に近付かなくなっただけ、僕の心には重しがつている。どうして嫌なのだろう。大嫌いな姉上が人気者になるのが許せないからだろうか。そう考えてみたけれど、なんか違う気がする。姉上が特定の誰かと親しげにされているとイライラむかむかする。僕はこの感情の名前をまだ知らない。

## アルトの回想 4

姉上との距離は埋まらない。年々開いている気すらする。姉上の見下すような嫌味も絶好調だし、僕も顔に出して憎々し気に睨み付けてしまう。口を開けば嫌味の応酬。陰悪さは増すばかり。周囲も仲の悪い姉弟だとすっかり認識している。

姉上は体が少し丸みを帯びてきた。女性らしくなった。それでも大人の女性というのにはまだほど遠くて、子供と乙女の間層の、体つきが女性らしくなったのに妙に無防備な様を見せている。

「まあ、みつともない。靴紐がほどけていてよ。」

姉上はそう言うて屈んで僕の革靴の靴紐を結びなおした。姉上の白いブラウスの開いた合間からは膨らみかけた乳房がのぞいていて僕は局部に熱が集まるのを感じた。滑らかで柔らかそうな膨らみに触れてむしゃぶりついてみたい。そんな欲求が沸騰した。いや、むしろそうする自分を想像して口の中に唾液が溜まった。靴紐を結びなおしている姉上を振り払って前かがみで逃げてしまった。

僕は眠ると時折淫夢を見るようになった。相手はいつも姉上で、いつかマーティンに見せていたようなはにかんだ顔で僕を淫らなことに誘ってくる。昼間姉上を見ていても邪な思いに駆られることがあって心穏やかではない。近づくこととふわりと香る甘い体臭にもくらくらさせられた。

認めてしまうと、姉上を性的な対象として捉えている。いや、僕は姉上を一度も『姉』だなどと思ったことはない。いつだって『一人の女性』だと思っている。

でも淫夢の相手がいつも姉上というのは少々問題な気がする。恋の一つも覚えれば対象も変わるかと思いい、他のご令嬢と親しくしてみ



たりもするが、性の対象が姉上以外に移ることはついぞなかった。それがどういう意味なのかは考えないようにしていた。姉上は僕のことを大嫌いなはずだから。

\*\*\*

僕が年頃になつて淫夢を見た時に暴発するようになってからは屋敷中の人間に生ぬるい目で見られているようで居た堪れない。

自分で処理することも覚えたが、いつも妄想するのは姉上ばかりだ。他の女性の裸体を妄想しても、全然滾らない。僕はちよつとおかしいのかもしれない。すごく不安だ。

姉上の妄想で処理はすれど、実物の姉上与親しくなることはない。寧ろ邪な目で見てしまう罪悪感から、僕の態度はますます素直になれない。いつそマーティンのように姉上に思い切つて優しく接してみたいと思うものの、長年培つた頑なな心がそれを許さない。姉上は僕のことを大嫌いなはずだから優しくしてもきつと微笑みはしないだろう。そう思うのもつらい。いつそのこと姉上が本当に心の底から嫌な女であればこつも苦悩しなかつただろうに。姉上は時々優しい態度をとるから深みから抜け出せない。

ああ、姉上…苦しいよ…

毎晩切なく姉上を想つて…

\*\*\*

「ちよつと待つてくださいまし。話の雲行きが怪しいですわ。青少年の性への欲求の話など長々と聞かされても困りますわ。この話長いです?」

私はアルトの話に待ったをかけた。

「僕の姉上に対する執着と葛藤なら何時間でも語れると思いますけどね。平たく言うと一目惚れして姉上の辛辣な難解言語でハートブレイクしたものの、忘れることが出来ずに未練をこじらせて、己の恋を自覚できずに、ひたすらに嫉妬に燃え、精神的にも性的にも悶々とする生殺し期間を延々と過ごしてきた… ってところです。」

アルトは眉間にしわを寄せながらハーブティーを飲んだ。味がやはり好きになれないのだろう。

「姉上は？」

「アルト如きが乙女の秘密を暴こうなどとは100年早いですわ。」

（訳：恥ずかしいから内緒。）

「ずるいなあ。」

本当は私もアルトのその綺麗な双眸に惹き込まれて、大大大大好きになったんだけど、この通り本心と噛み合わない態度とっちゃって、それでもアルトが好きだったから目にする構いに行っちゃって、アルトから初めて「大嫌いです」と言われた日は部屋に帰って泣きはらしたよ。私はアルトが好きで、多分ほのかに恋情混じりの好きで、それでもアルトは私のこと大嫌いなんだと思ったら涙が止まんなかったよ。3日間枯れるまで泣いて、すっきりした後、態度は直せないだろうし突っかかって行っちゃうだろうけど、恋とかはしないようにしようって、ほのかな恋情は箱に封じ込めて胸の奥にしまい込んでたんだ。私が自分を『アルトにとっての異性』ではなくて『アルトのおねーちゃん』と認識し始めたのはその時から。

「あとは姉上もご存じの展開。姉上によく似た仮面の女性に姉上を重ねて抱き潰して、運命の人だ、なんて舞い上がるも相手分からず。探してみても見つからず。よくよく考えるとその女性じゃなくて姉上が好きで姉上を抱きたかったのだ…と自覚。姉上への求婚者にや

きもきしながら、姉上にアプローチして、今に至る。初めての人が姉上だったというこの上もないご褒美付き。姉上って酔うといつもあんなに可愛いのですか？僕の前以外では飲まないでほしいのですけど。」

「お酒などという有毒物質の摂取は今後控えますわ。（訳：酔ったら困るから禁酒します。）」

「僕と二人きりならいいですよ？あんな風に情熱的に求められるのは燃えるので。」

うつ…恥ずかしいです。

## アルコールは桃の香り

婚約はいち早く発表された。結婚式への招待状は後日送るということで。まだどの誰を招くか目録も出来てないし。婚約披露宴とかはやらないお家が多い。うちもやらない。ぶっちゃけて言うと、貴族の婚約なんて、家の指針で容易く破棄されてしまうものなので、仮決めである『婚約』で披露宴など開いてしまうと破棄しにくいからだ。婚約披露宴に招いて、更に結婚式にも招くと二度ご足労願うことになるし。王都に居を構えている貴族なら2度呼ばれるくらいいいかもしれないが、領地に住んでいらっしゃる方は出席するのも一苦労なのだ。

本日はヴェルモンテ家主催の夜会。

会場でお会いたバーベナ様が婚約を祝ってくれる。

「おめでとう。」

「わたくしも遂に人生の墓場への片道切符を手にしましたわ。（訳：結婚のお約束が貰えたんだよっ！）」

私は左手の薬指に光るダイヤの指輪を見せた。これがまたきらきら光って綺麗なんだ。婚約した者は売約済みであることを示すために左手の薬指に指輪をつけるしきたりがある。勿論婚約者から送られたもの。

「素敵じゃない！」

バーベナ様も意中の方から無事プロポーズが頂けたそうだ。左手の薬指に指輪をしていた。「切符が無駄にならないと良いですね。

（訳：無事結婚できると良いよね）」と話し合った。私はバーベナ様を結婚式に招待するつもりでいるので、お互いの結婚式が被らないように調整しましょうね、という話をした。

「でも弟君の童貞が食<sup>チェリー</sup>べられなかったのは惜しかったですわね？」

バーベナ様が茶化した。

「あら。わたくしは美味しくいただきましたわよ？」

ふふと笑う。甘くて熱くて激しい美味しいチェリーでしたわよ？

「え？え  
たの？」

…アルト様が探していたのってロレッタ様でし

「ええ。」

アルトに嫌われてると思い込んでいたから名乗るつもりはなかったけれど、もう秘密にする必要もないだろう。婚前で貫通している情報が回ってしまうことになるが、責任とってもらえるようなので構わない。

「さつさと名乗り出てあげれば良ろしかったのに。してロレッタ様の股にはどんな秘密が？」

「馬鹿ですの？そのような秘密をペラペラ喋るはずがないでしょう？アルトとわたくしだけ知っていればいいことですわ。」

「確かに。」

暫く他の男性と踊り、暴言に引かれつつ夜会を楽しんだ。

踊り疲れると再びバーベナ様と合流した。バーベナ様は軽食を召し上がっていた。食べにくそうな軽食を器用につまんでいる。

「まあ、以前もつと痩せたいと仰っていたのは妄言だったのですわね。まるで上品な豚ですわ。（訳：痩せたいって言ってなかったっけ？そんな食ベにくそうな軽食上手に食べるもんだね？）」

「少しくらいなら大丈夫ですわ。こちらのお肉は美味しくてよ。」

「食い意地の張ったバーベナ様の御推奨なら頂こうかしら。（訳：グルメのバーベナ様が美味しいって言うならさぞ美味しいんでしょうね。）」

遠火でじっくりローストされたお肉を頂く。しっかりと火が通っていないがレアな感じの食感でとても美味しい。ソースもほんの少しだけ酸味があって食べやすい。

「まあまあですわね。（訳：とても美味しいですわ。）」

「ここはお食事が美味しいことで有名なお屋敷だから色々食べてみましょうよ。」

「まあ、あなたもたまには知恵を働かせることが出来ますのね。（訳：ナイスアイデアです。）」

2人で品が悪くならない程度摘まんで食べた。どれもこれも絶品。

「良い食べっぷりだね。」

20代前半の若々しい紳士が声をかけてきた。

「レディの褒め方になってませんわ。（訳：お恥ずかしいです。）」

私はツンとそっぽを向いた。

「すまないね。本当に美味しそうだったんだ。僕もそれを頂こ

うかな。」

三人で軽食を食べた。この男性は本当によく食べる。健啖家だ。

「僕はロジェ・ニューバーグ。レディたちは？」

「バーベナ・コロネですわ。」

「ロレッタ・シエルガムですわ。」

ロジェ様は茶色い御髪に青い瞳の、中々の好青年だった。割と逞しい体つきをされている。

「実は食べるのが趣味でね。今夜の夜会は楽しみにしてたんだ。」

ざつくばらんに話す。食べるのが趣味だけど食べてばかりだと太るので体も鍛えているそうだ。かなりがっちりした体格。好む女性は多そうなのがする。

飲み物を勧められてクイツと飲み干した。桃のような味のジュースだと思った。

「ロレッタ様、これお酒みたいですけれど、そんなに一気に飲み干して大丈夫？」

バーベナ様が心配そうに尋ねてきた。

「ん？んー…」

胃がポカポカする。お酒？でももう飲んじやつたから吐き出せないし。

暫くするとアルコールが回ってきたらしい。とても愉快的気持ちになる。

「そうなんだあ…わたくしはぱたーじゅのすーぷがすきで…」

「美味しいですよ。カボチャも旨いですが、ジャガイモのポター  
ジュなんかも。」

「うん。」

にこおと微笑むとロジェ様が頬を赤らめた。

「ロレッタ嬢は美しいですね。」

ロジェ様がどこか熱のこもった視線で見つめてくる。

「ありがとお。」

私は笑顔の大盤振る舞いだ。ロジェ様がますます赤くなる。

「ロレッタ様、罪作りですわね…」

バーベナ様が呆れたような声を出した。バーベナ様もくいつと行けばいいのに…

「姉上。」

アルトがやってきた。

「あるとお。」

「お酒を召されたのですか？」

アルトはちょっと厳しい顔だ。



「ジュースと間違えたみたいなの。」

バーベナ様が肩を竦めた。

「早く連れて帰って。哀れな恋の奴隷が出来上がる寸前よ。」

アルトがロジエ様を見て顔を顰めた。

「姉上。帰りましょう。」

「あるとお。だっこ。」

私は両手を伸ばした。アルトは困った顔をした。

「ご自分で歩けませんか？」

「わかんないけどだっこがいい。ぎゅってして？」

アルトは悶絶しながら私をお姫様抱っこした。私はギュッと首筋に抱きつく。アルトのいい香りがする。夢見心地だ。家に帰ってからはお母様に叱られたけど。

## ハリエットの回想1

「ハリエット嬢、遂に姉上と婚約できました！色々助言してください、ありがとうございます。」

アルト様が輝くようなお顔でお礼を述べてきた。

「良かったですわね。」

私は幼子を見守る母のような目線でアルト様を見た。

\*\*\*

私の名はハリエット・シリエル。ロマンス小説の愛読が趣味の18歳。ある程度自我が芽生えてきた頃はがっかりしたものだわ。私は酷い丸顔で、実際はそんなことないのにポチャツとして見える令嬢だったから。私の憧れるロマンス小説のヒロインには到底遠い顔。髪は茶色で、瞳は榛色。ほんの少しだけそばかすがある。まあ自分のことは早々に諦めたけれど、代わりに他人の恋愛相談にはよく乗るようになった。恋愛のお手本はロマンス小説。くっつけた男女は数知れず。ついたあだ名は『やりて婆』。酷いあだ名ですこと。『恋のクピド』と呼んでくださればよいのに。男性の、あるいは女性の、恋の相談に乗って、そのリアルなロマンスを楽しむのが何よりの生き甲斐。

最近密かに注目している男性はアルト・ディナートル様。ディナートル侯爵家の御嫡男。亜麻色の美しい髪に、神秘的な紫と緑のオツドアイ。目鼻立ちはくつきりと美しく、均整の取れた凛々しい体つきをしている。まだ16歳で、もう少し身長に伸びしろがありそう。

品の良い素敵な貴公子。まさにロマンスノベルズのヒーローに相応しい男性。何故私がアルト様に注目しているか。勿論私が恋してしまったから……なんていう理由ではない。アルト様はどうやらご自身のお姉様に片思い中なようです。いつも瞳で追っては切ない溜息をついていらつしやる。これが血の繋がった姉弟でしたらこの国では婚姻できないので悲恋コースですけれど、お二人は血の繋がらない姉弟。なんて萌えるシチュエーションなのでしょう。そりゃあ、実のご姉弟でしたらそれはそれで禁断愛チックな雰囲気で萌えますけど、私はハッピーエンド至上主義なもので。読むなら悲恋もアリですが、リアルなら断然ハッピーエンドですわ。

このアルト様、大変嫉妬深い性質の男性なようです。お姉様のロレッタ様が他の男性と親しくしていると、射殺さんばかりの視線で見るとすわ。それならそれで、ロレッタ様にアプローチされればよいのに……と思うのですけれど、どうもロレッタ様の操る言語が特殊過ぎてすっかり嫌われていると思ひ込んでいます。少し目線を高く持ってみればロレッタ様の吐く言葉など可愛い悪態にしか思えませんのに。

いつかお節介を焼くぞ。焼くぞと思っていたのですが、ここにきて急展開。

アルト様が仮面舞踏会でまぐわった仮面の女性に恋に落ちてしまったそう。その仮面の女性を探しているようだ。お姉様は!?

結局、仮面の女性は見つからずアルト様は意気消沈。

夜会でアルト様に声をかけた。

「アルト様。お初にお目にかかります。ハリエツト・シリエルですわ。どうぞよしなに。」

「宜しく。」

「アルト様が恋に落ちた女性というのはどのような方なんですの？ 名乗り出ていらつしやらないというのは既婚者であったとかではなくて？」

「彼女は、処女<sup>はじめて</sup>だったよ。シートには血がついていたから。」

あら、やだ、生々しいですわね。ロマンス小説も好きですが、官能小説も少し興味がありますわ。アルト様は回想するように目を閉じた。

「彼女は美しい焦げ茶色の髪をしていた。艶やかで緩く波打つ…姉上の髪のように。そして姉上のようなぱっちりした美しいサファイアブルーの瞳をしていた。鼻筋はずっと細く通り、ぷっくりした薔薇色の唇は誘うように濡れて…姉上のようなむっちりとした胸に細く括れた腰の、官能的な肢体の少女だった。姉上のような豊かな柔らかいお声をしていて…」

……………おい。

「……………アルト様。あなた意中の女性のお姿とお声を表現するだけなのに4回も『姉上のような』って仰いましたわよ？」

「え…？」

アルト様は色違いの瞳をパチクリさせた。自覚ないのか、この男…！！

「い、いや…でも彼女は、姉上と違って、こう素直で、情熱的で、甘えん坊な、可愛い方で…可愛いお声で『あると』『あると』と求めてくださった…」

「……………アルト様はその女性とロレッタ様が同時にアルト様に愛を告げ、その心を乞うたら、どちらをお選びになりますか？」

「……………」

沈黙が答えである。アルト様のお心はロレッタ様のものだ。

「いくらロレッタ様に似た女性だからと言って身代わりにするのはその女性に失礼ですわ。」

ズバリと指摘するとアルト様は意気消沈された。

「姉上……」

切なくロレッタ様を呼んでいる。くううう。やっぱりロマンスはこうでなくっちゃね！一途に愛し、迷い、たった一つの愛を手にするのですわ。

盛り上がる私とは反対にアルト様の表情は酷く暗い。

「……でも……姉上は僕が嫌いなのだ。」

「本当に？ロレッタ様がそう仰ったの？」

ロレッタ様は悪態はつくし、嫌味っぽいし、好きだとは言わないけれど、「嫌い」とも中々言わない。本当に「嫌い」だと仰られたなら、真実お嫌いなのだと思いますけれど。

「『嫌い』とは一度も言われたことはないけれど……どうしてそう突っかかってくるのかと問うと『目障りだから』と仰る。」

「多分それはロレッタ語で『気になってるから』という意味だと思いますわ。」

「ロレッタ語？」

アルト様が怪訝そうな顔をした。

「ロレッタ様は自分のお心を『素直に』言葉で表現できない方とお見受けしました。言葉を額面通りに受け取るのではなく、『何を仰

りたいか』推理しながら聞くと全然別の言葉に聞こえますわよ。」  
「……。」

アルト様は難しい顔で黙り込んだ。

「あ、ほら、今他のご令嬢に『あなたの髪って無駄にきらきらして目障りね。とても派手だわ。』って仰いましたけれど、あれは翻訳すると『あなたの髪はきらきらしていて、とても綺麗ね。すごく目立つわ。』と仰っているですよ。」

ロレッタ様が他のご令嬢の綺麗な金髪を褒めていらつしやる場面を見た。褒められたご令嬢は貶されたと思って嫌そうな顔をなさっているけれど。

「……好意的解釈すぎるのでは？」

「アルト様は本当にロレッタ様の性格がそんなに悪いとっていらつしやるの？お家ではそんなに思いやりがない？」

アルト様は俯いた。

「姉上は……優しいです。怪我をした子犬を拾って手当てして里親を探してあげたり、侍女が高価な壺を割ってしまったても許したり。」

「……でも言葉がきつくて。『わたくしの目の前で死なれるのなんて縁起が悪くて堪りませんわ。なんて迷惑なのでしょう。』とか言っただ嫌な顔をしたり、『わたくしの気に入らない壺を態々割ってくれるなんて、あなたの粗忽もたまには役に立つのね。』なんて厭味つたらしく言うのです。」

なんともロレッタ様らしくて笑ってしまった。

「それは『死なないで』と『これくらいの粗相気にしなくていいのよ?』っていう意味ではないですかしら?」

「……。」

「アルト様は素直すぎますわ。もつと真意を掴んで差し上げなくてはロレッタ様の真実のお姿を見るのなど、夢のまた夢ですわよ。」

「……。」

「ロレッタ語…レッスンいたしましょうか?」

「お願いします。」

私はアルト様の講師役を務めることとなった。

ところでいくら酔っていたとしてもアルト様のような高位貴族を「アルト」「アルト」と呼び捨てにする女性はどうくらいいるだろう? ちよつとした疑問である。

## ハリエットの回想2

レッスンを続けるとアルト様はロレッタ語のコツを掴んできたようである。しかしそれに伴って自分が過去にロレッタ様からどれほど気に掛けられてきたかをも思い知ってしまい、すっかり凹んでいる。ロレッタ様は非常に細やかにアルト様にお声がけしていたようだから。あんなに心を砕いてくださったのに自分ときたら…と激しい自己嫌悪に襲われているようだ。

「僕は姉上のお心にも気付かずに『大嫌い』などと心ないことを…」  
「それはきつとロレッタ様も傷付いたでしょうね。」

ロレッタ様はロレッタ様で顔を合わせる度に突っかかっていく程にアルト様のことが大好きなようですから、こう『恋の予兆』的なものをプチッと潰しましたわね、アルト様。ロレッタ様はアルト様をよく気にはかけていらっしやるし、まだ脈はあるのではないかと思いますけれど。

ロレッタ様は今ジークムント様に言い寄られている真っ最中であるようだ。アドヴァンス様、ジョセファン様に続いて、飛び切り美しい生きた宝石のようなジークムント様がお相手ではアルト様のお気も休まらないであろう。

仕方ない。ロレッタ様は特殊なロレッタ語をお話しになる変わったご令嬢ではあるけれど、お優しいのは間違いがないし、すごく美しい。緩く波打つ焦げ茶色の艶々の髪に、長い睫毛に縁取られた澄んだサファイアブルーの大きな瞳。鼻筋は細く通り、ぷっくりした唇は薔薇色。滑らかな白絹のような肌なのに頬は淡い桜色に輝いている。肩や腕などは華奢でありながら男性を魅了してやまない豊かな双丘まで装備していらっしやる。キュツとつかめそうに細い腰に丸



みのあるお尻へのなだらかなラインが艶めかしい。ロマンス小説なら誰もが憧れるヒロインの様な美貌の少女だもの。アルト様のうに目立った色彩をされた方じゃないけれど、その美貌は人形の様。ロレッタ語を上手く翻訳できる方ならば是非とも手中に収めたい、珠のような少女ですもの。

「アルト様も、いくら睨んでも視線で人は殺せません事よ？素直にロレッタ様にアプローチされたらよろしいのに。」

「やってるよ！可愛いつて褒めた！」

どうせ照れながら拙い褒め言葉を述べたのだろつ。年頃の少年らしい初々しさは感じるけれど、意中の女性の心を射止めるには弱すぎますわ。

「もつとドラマチックに奪わねば、他の男性に奪われますことよ？」  
「姉上……」

アルト様は切ない溜息をついている。ジークムント様は正直言つて強敵だ。アドヴァンス様は悪い意味で大人の女遊びに慣れ切つていたので純愛路線のロレッタ様にはあまり合わなさそうだと思つた。ジョセファン殿下は王太子妃の位はロレッタ様には荷が重いと思つた。でもジークムント様は性格にもお立場にもご容姿にも何一つ傷のない極上の男性。条件だけを見れば思わずよろめくのも無理はない。事実ロレッタ様はジークムント様とは頻繁にお手紙をやり取りしているというのがアルト様情報だ。

ジークムント様は大変なダンス上手という噂。上手にロレッタ様と踊られている。アルト様は情けなく指をくわえてそれを見ている。折角推してるといふのになんてへたれな。絶対アルト様には脈があると思うのに。積極的にジークムント様がアプローチしてロレッタ様が靡いてしまつたら目も当てられませんわよ。

「アルト様にはもつと積極性というものがあつたと思ひますの。」

「積極性……」

「もう過去に『大嫌い』などとほざいてしまつた発言は取り消せませんから、もつと大きくストレートに想いを伝えるような……」

「告白などして、姉上に『大嫌い』などと言われたら生きていけません……」

アルト様がいやいやと首を振つた。なんと情けない。見た目は極上のヒーローなのにとんだへたれだわ。こんなヒーロー、ロマンス小説に需要あるのかしら？

「情けない。相手に『大嫌い』と言われる覚悟もなく『大嫌い』などとはざいたんですの？言われたら言われたで、甘んじてお受けなさいな。その上で諦めずにアタックし続けられるかはアルト様次第ですわ。」

「……。」

私が見たところ脈はあるのですから、情熱的にアプローチすればすぐにころりと落ちてくださると思ひますわよ。

一曲踊られたロレッタ様は少し頬を上気させて楽しげな顔をしていゐる。あ、ジークムント様ダンスのどさくさに紛れてロレッタ様を抱きしめた。これは中々ときめく仕草ではない？美味しいわ。

ジークムント様にテラスに誘われたようだ。不味い。私はそう思つた。優に20組以上のカップルをまとめ上げてきた私の勘が囁いた。あのジークムント様のお顔……決めるつもりだ……

「アルト様、今すぐ覚悟を決めてロレッタ様を奪いにお行きなさいまし。ジークムント様は今夜決めるつもりですわよ。テラスに出られました。告白シチュエーションは整つています。」

「！！！」

アルト様は嫉妬に駆られて居ても立ってもいられなくなったのだろう。足早にテラスへ向かった。

私もこっそりと後をつけるとロレッタ様がジークムント様のキスを拒んでいるところだった。アルト様が割って入り、ジークムント様を追っ払った。そしてロレッタ様の唇を強引に奪う。

きたあああああああ！強引壁押し付けちゅ　　！！ああ、

しかも物凄い濃厚！そんなエロティックでいいの！！？

すっかり堪能させていただきました。御馳走様です。

テラス脇から立ち去る際に出てきたジークムント様と目が合った。

「覗きとはいいご趣味ですね。」

「ほほほ。ジークムント様はご愁傷様でしたわね。」

ジークムント様は困ったように笑った。

「傷心です。」

「私、失恋後のアフターケアも得意ですよ。」

「ふふ。ではお言葉に甘えて。あちらで何か飲みながらお喋りしませんか？」

ジークムント様の破れてしまった恋のお話を拝聴した。ジークムント様は振られてしまってもいい男だったです。はい。

\*\*\*

「本当にハリエツト嬢にはお世話になりました。」

アルト様はニコニコである。念願叶って脳内がお花畑と見える。幸

せそうなことは良いことだ。私もたつぷり生のロマンスを楽しませていただきましたわ。

「いえいえ。こちらこそご馳走様でしたわ。」

「ご馳走様……？」

アルト様が首を傾げた。

「こちらの話ですわ。お気になさらず。おほほ。」

ハリエット・シリエル。18歳。通称『やりて婆』。本人の春はまだ遠い。

## ハリエットの回想2（後書き）

『恋の予兆』とは即ち私たちの言う『フラグ』ですな。

## 幼馴染襲来（前書き）

### 4部構成。

幼馴染到来

思い出のクッキー

ダイヤの指輪

宝物が増えた日

シリアシタツチの4話です。

## 幼馴染襲来

「アルト様：わたくしのこと覚えていらつしやる？」

私とアルトの婚約が広まり始めた頃、夜会でアルトに声をかける令嬢がいた。私は一目見てはっと息を飲んだ。あまりにも美しかったからだ。淡い淡いプラチナブロンドに美しいアクアマリンの瞳。抜けるように色が白く、唇だけがぱつと花が咲いたような桃色。小ぶりの鼻に弓型の眉。優しげで、儚げで、触れれば溶けてしまいそうな淡雪のような乙女。身体も全体的に華奢な印象だ。淡くてふんわりとした水色のドレスが良く似合う。

「……もしかしてシェイラ？」

「良かった。覚えててくれたのね。アルト。」

急に言葉が砕けた。二人で名前を呼び捨てにしあつて再会を喜んでいる。

二人は一気に親しげな雰囲気醸し出す。どういう関係か知らないが、随分と仲が良さそうだ。

「シェイラ、どうしたんだい？領地で暮らすって聞いていたのに。」

「ふふ。王都が懐かしくて…アルトに会いたくて…来ちゃった。勿論パパも一緒だけど。」

シェイラ様が魅力的な笑顔をアルトに見せて二人で仲良さそうに喋っている。おねーちゃんは無視されてちよつと面白くないです。アルトが、はっと気づいて私を紹介してきた。

「あ、シェイラ、紹介するよ。僕の義理の姉で、婚約者のロレッタだよ。姉上、こちらは生まれてから僕が5歳くらいまで近くの屋敷に住んでた幼馴染のシェイラ。僕と同じ年だよ。」

「婚約者……」

それを聞いた瞬間、シェイラ様はぽろぽろと涙を流して泣き崩れてしまった。

「シェイラ!？」

アルトが慌ててシェイラ様を支える。シェイラ様はアルトの胸に縋って泣いた。その泣き顔の美しさに私は思った。………ああ、この令嬢涙の出し入れ自由なタイプだね。自分が泣き崩れるときどうすれば一番美しく泣けるか計算しているタイプだ。好きになれない……一瞬でそう感じた。

「ごめんなさい、急に泣いたりして……ちょっとショックだったから、つい……」

シェイラ様は悲しげな顔で微笑んだ。「悲しいけど無理して笑ってるよ」感がすごい。演技派だと思う。私は偽物臭い表情だと思ったけれど、アルトはちよつと心に響いたような顔をしている。

「宜しく願います。お姉様。」

アルトの胸に縋りついたままという失礼極まりない体勢で挨拶してきた。今婚約者だって紹介されたばかりなのにね。

「……馴れ馴れしくお姉様って呼ばないでくださる? (訳: 私あなたのおねーちゃんじゃないし、義姉でもないよ!)」



「う、ごめんなさい…！」

シェイラ様は「ショックです！」という顔で涙をこぼした。この程度で伝家の宝刀『女の涙』を見せるのはズルいと思う。まるで私が苛めて泣かしたみたいじゃない。周囲の人々もちらほらと私に非難の目を向けている。

「あ、姉上…シェイラは気が弱いからあまり…」

アルトはシェイラ様を庇って私に苦言を呈した。アルトは私の口調が普段からこうであることくらい知っているはずなのに。

「なんですの？アルト。わたくしがシェイラ様を脅してるとでも言いたいんですの？それともシェイラ様はアルトの特別だからわたくしにも特別扱いしろと言ってるの？（訳：その子アルトにとって特別な女の子？おねーちゃん面白くないです。）」

「そう言うわけでは…」

アルトはへどもどした。シェイラ様がずっとアルトの胸に縋り付いているのも気に入らない。婚約者の目の前で、お相手の胸に縋りつきっぱなしってどうなの？すごく失礼だと思うし、私はムツとした煮え切らないアルトの態度にも腹が立つ。そんなに幼馴染というのは大切な存在なのだろうか。

\*\*\*

翌日から私にとってストレスのたまる日々が始まった。シェイラ様が突然屋敷にやってきて「来ちゃった。」とペロツと舌を覗かせたのである。

3人でお茶をするが、シェイラ様とアルトはず

つと小さな頃の思い出話をしている。「……ってことがあったよね。」「って。私その話知らないし。」

「その時メリッサ様の作ってくださった焼きリンゴの味が忘れられなくて……」

「二人で食べたんだよね。半分に切ったのにシェイラが『そっちの方が大きい気がする……』って何度も見比べて……」

二人でクスクス笑っている。とても居心地が悪い。私は5歳前の記憶なんて全然うる覚えだが、この二人は本当によく覚えている。

「それでアルトが誕生日にカメオのブローチをくれて……あれ、わたくしの宝物よ。今も大切にしてるの。」

「ありがとう。すごく嬉しいな。誕生日と言えば……」

「楽しい？」

私は尋ねた。二人がはつと顔を上げた。ようやくこの席に私がいることを思い出した顔だ。多分元々私に対して良い感情を持っていないシェイラ様はともかく、私を愛していると言って憚らないアルトまで私の存在を視界から抹消していたのが酷く面白くない。「私以外を見ないで！」なんて言えないけれど、それにしたっておざなりにし過ぎではないだろうか。

「二人にしかわからないお話はさぞや楽しいでしょうね。（訳：無視されてとても寂しいです。）」

「ご、ごめんなさい……つい懐かしくて……」

シェイラ様が怯えた様子でぶるぶる震える。そのさも「ロレッタに苛められてます」というポーズも私の神経を逆撫でする。

「う、ごめんなさい、姉上。あ、姉上の話も……」

というところでアルトが言葉に窮した。私はそれを見てふんと鼻を鳴らした。

「……どうせわたくしにはアルトと楽しく語れるような過去の思い出なんてありませんわ。」

ずっとアルトに嫌われていたのだもの。「大嫌い」って言われたし、私が話しかける度に苦虫噛み潰したような顔してたよね。私、アルトに誕生日プレゼントなんて貰ったこともないし。何でも良かったのに。飾りボタン一つでもくれていれば私だって宝物にしたのに。自分で言ってて自分で傷付いてしまった。ああ……とてもつらい。

「……部屋に下がらせていただきますわ。ごゆっくり。」

私は席を立った。

「あ、姉上……!」

狼狽えたアルトの声が聞こえる。アルトのばか。おねーちゃん、もう知らない。

## 思い出のクッキー

その晩、私は生まれて初めてアルトを無視した。ダイニングに下りてきたアルトと顔を合わせたが何も言わなかった。いつも会うと例え嫌味（に聞こえる特殊言語）であろうと何かしら喋っているけれど。私も何も言わなかったけど、アルトもちよつと表情を硬くした。そういう顔をするのは何か疚しい気持ちを抱えているからではない？とおねーちゃんは勘繰ってしまうよ。

「ロレッタちゃん、どうした？アルトと喧嘩したか？」

お父様に聞かれた。

「いいえ。……本当に何もなかったんです。」

アルトとの間にいい思い出なんて何もなかった。何かを半分こして食べたこともないし、何かを貰ったこともない。私が優しい言葉をかけることもなかったけど、アルトから優しい言葉をかけられた覚えもない。アルトが私の様子を見て唇を戦慄させた。

「あ、姉上。シェイラとはただの幼馴染で……本当にそれ以上のことは……」

「……無様ね。なんの言い訳？」

別にそんなこと尋ねてないのに……自分からそう言いだすと逆に何かあったみたいですよ。

「本当に……何もなかったじゃない。」

私たちが語れることなんて一つも。

「姉上…何を怒ってらっしゃるのですか？」

「怒ってないわ。」

傷付いてるだけ。

「怒れた方が何倍かましだったような気もするけれど。」

私の心を図りかねるアルトは悩み始めてしまった。私は食事は早々に切り上げて自室に籠った。何だかアルトに「大嫌いです」って言われた日を思い出す。あの時も部屋に閉じこもって泣いたっけね。あの時アルトに恋はしないようにしようと決めたのに。

でも相手がアルトじゃなくても同じだ。恋をすれば、こんな風に傷付く日もある。別々の人間なのだからぴったり心が重なることなどないのだ。降って湧いた幸せな恋に浮かれて、ちょっと前のめりになりすぎてたのかも。アルトとは一歩距離を置いて、自分を見つめなおしてみよう。

\*\*\*

次の日もシェイラ様はやってきた。私はお茶会には参加せず、自室に籠った。お茶会に参加したらまた無視されて、冷静でいられなくなりそうだったから。嫉妬に駆られて無様にアルトやシェイラ様を罵るような真似はしたくない。

中庭ではアルトとシェイラ様がシャボン玉を吹いている。幼い頃の思い出でも思い出したのだろう。シェイラ様の楽しげな声が聞こえてくる。窓から顔を覗かせると楽しそうに笑っているアルトが見えた。本当に楽しそう。ぼんやりと見つめてしまう。

……アルトが私に何かくれたことはないけど、私がアルトにプレゼントしたものはいくつがある。明日は、私も少し頑張ってみよう。私だってやられっぱなしじゃ悔しいし。

\*\*\*

翌日私は厨房に籠ってクッキーを焼いた。アルトの10歳の時の誕生日プレゼントは手作りのクッキーを渡した。渡したと言っても、メッセーじカードと共に枕元に置いてきたただけだけど。喜んでくれたかどうかはわからない。アルトは何も言わなかったから。でも一方的だとしても、少しくらいは思い出になってるかもしれない。私は一生懸命心を込めてクッキーを焼いた。普段料理などしない。きつと上手ではないだろうけど、喜んで笑う顔が見たい。アルトは私にも笑ってくれるだろうか。昨日シャボン玉を吹いていた時みたいな顔で。

焼き上がったクッキーを少し冷まして紙袋に入れて綺麗にラッピングした。アルトが笑ってくれるかもしれないと思うとほのかに期待で胸が膨らんだ。

午後のお茶に間に合うように持って行った。一緒に笑って食べよう。アルトの横顔が見えた。

「アル…」

声をかけようとして止まってしまった。アルトはシェイラ様の手作りと思しきクッキーを口に運んでいた。遠目にも私のものより数段きれいに焼けてるのがわかる。

「美味しいよ。シェイラ。ありがとう。」

アルトが嬉しそうに笑った。

「あれ、姉上…どうなさ…」

アルトが私に気付いて笑顔で声をかけようとした。私は手に持っていたクッキーをゴミ箱に投げ捨てて自室に帰った。一人で泣いた。苦しいよ。切ないよ。だから恋なんてするんじゃないかった。恋は毒だ。私を殺す。

トントんと扉がノックされた。

「……………」

「姉上。アルトです。」

「……………」

扉を開けるつもりはなかった。枕に顔を埋めて枕カバーに涙を吸わせた。ずしっと扉に体重がかかる。アルトが寄りかかっているようだ。

「姉上、クッキー美味しかったです。」

ゴミ箱に捨てたのに食べてくれたんだ…

「僕の為に作ってくださったんですね…？すごく嬉しかったです。」

「……………」

「僕の10歳の誕生日にも姉上がクッキーを焼いてくれましたよね。」

「……………」

覚えててくれたんだ…

「実はあの時のクッキーはお砂糖とお塩が間違っ入っていて、す

「ごくしょっぱかったです。」

「……！」

恥ずかしい…やっぱり私たちの間にいい思い出なんて残らないんだ。また声を殺して涙が出た。

「姉上はいつも完璧で、綺麗で、そんな人もこんな間違いするんだって思ったら…なんだか少し笑えて…実はすごく嬉しかったです。」

「……。」

「今日は上手に焼けていて…すごく美味しくて…でも、姉上を悲しませたことがすごく悲しいです。美味しいよって言って姉上に笑ってほしかった…」

私もそうして欲しかったけど…シェイラ様のクッキーの方が美味しそうだった。喜んで食べてた。思い出すと苦しい。

「また、いつか作ってください…今度こそ姉上を笑わせてみせるから…」

「……。」

「姉上…」

呼びかけには答えない。

「好きです。姉上…」

私は嗚咽を上げてしまった。  
私も好きだよ。アルト。



## 思い出のクッキー（後書き）

アルト10歳のお誕生日のクッキーはロレッタちゃんは味見してません。物のほとんどが焦げてしまって、プレゼント分を確保したら、味見分が取れなかったからです。

ロレッタちゃんはクッキー初挑戦でした。

## ダイヤの指輪

シェイラ様は毎日やってきた。無邪気そうな笑顔で「来ちゃった。」  
と言って笑う。そのくせアルトが見ていない時に私を見下して笑う。  
あからさまな嘲笑。嫌な笑顔だ。横っ面を張りたくなる……やらないけど。

夜会でもアルトにべったりだ。

「アルトの幼馴染のシェイラ・プチリーズです。」

『幼馴染の』というのがすごく得意げだ。シェイラ様は可愛いので  
すぐに人気者になった。皆に「可愛い」「可愛い」と持て囃されると、  
恥ずかしそうにそつとアルトの陰に隠れる。その様子がまた可愛い  
というので人気は高まるばかりだ。アルトは社交界にまだ不慣  
れなシェイラ様の為に挨拶回りを行っているようだ。

私は一人でバルコニーから月を見ている。

「ロレッタ様。あんなの調子に乗せておいていいの？」

バーベナ様がニヤツと笑う。人気のない私に構うのなんてこの方くらい。

「あなたの小憎たらしい顔も、今は歓迎よ…（訳：寂しかったから  
顔を見せてくれて嬉しいわ。）」

「弱気」…」

幼馴染は特別らしいからね。私にはそう言った相手はいないからよく  
わからないけれど。幼い間の記憶は輝かしいらしいけど、私の幼

い間にある記憶はいつも嫌そうな顔をしたアルトばかり。それ以前の記憶は少し曖昧だ。特別親しい子供はいなかったし。

「アルト様もちよつとどうなの？愛しの姉上をこんなに弱らせて。」

「何よ。バーベナ様はわたくしがアルトにシェイラ様と絶縁しろと迫ったら満足なの？ええ。寧ろそうしたいわ。出来るものならね。」

（訳：どうしようもないこと言わないで。）

「でもずっとこのままってわけにはいかないでしょ？」

「……。」

私はそつと婚約指輪を外した。

「ねえ、このダイヤ、少しくすんで見えないこと？」

月の光にかざす。貰った時はあんなにきらきら輝いていたと思ったダイヤは少しくすんで見える気がした。アルトの愛のように。

「もしかしたらガラスだったりして……」

「まさか。」

バーベナ様が笑った。によきつと白い手が出てきてその指輪を掴んだ。

「シェイラ様……？」

笑顔のシェイラ様が指輪を掴んでいる。

私から指輪をもぎ取るとバルコニーから投げた。それが理解できた瞬間私はシェイラ様の頬を思いきり引つ叩いていた。

「きゃあああああつ！！」

シェイラ様が大げさな悲鳴を上げて倒れる。注目が集まる。

「姉上……！」

やってきたアルトが、私が掌を振りぬいてシェイラ様が倒れている場面を見て、狼狽えた声を上げる。

「な、何故……？」

アルトが殴られたシェイラ様を庇うべきか私に駆け寄るべきか逡巡した。状況が理解できないのだろう。

「アルトお……」

シェイラ様が涙に濡れて甘えた声を出す。アルトの身体がシェイラ様の方に動きかかる。それを最後まで見ていたくなくて、私は足早に立ち去った。

「姉上……！」

アルトの声が背後で聞こえる。私は傍に寄りたくもなくて走って去った。

アルトは私に駆け寄ってくれなかった。シェイラ様の方へ行こうとしていた。私だってアルトを呼びたかった。アルトに守ってほしかった。シェイラ様に体を向けたアルトを思い返すだけで胸が張り裂けそう。

私は泣きながら指輪を探しに行った。涙で滲む瞳を一生懸命擦って、指輪を探した。周囲は暗くて全然見つからない。どこに落ちたのか、方角しかわからない。

「ロレッタ様…」

ランタンを手にしたバーベナ様が近寄ってきた。

「来たの…」

「…見捨てるのは友達甲斐がないってもんでしょ。」

一緒に指輪を探してくれた。ランタンの光に照らされて少しだけ明るくなった。

「……ものすごい噂になってたわよ。ロレッタ様が嫉妬に駆られてシェイラ様を打ったって。」

「そう……社交界は暇人の集まりね。（訳：嫌な噂ばかりすぐ広がるのね。）」

「そんなに暇なら手伝ってくれても罰は当たらないのにね。」

ランタンの明かりを頼りに二人で一生懸命探していると、慌てた様子のアルトが駆け寄ってきた。

「姉上…探しました。」

ほっとしたように私を抱きしめる。私は指輪のなくなった左手をそっと右手で隠した。

「何があったのですか…？シェイラは声をかけたら急に叩かれたと…」

「あのアマアアア！！」

バーベナ様が怒りに吠えた。

「黙って、バーベナ。……アルトはアルトの思っただまを信じればいいわ。どうせわたくしのことを嫉妬に駆られた悪鬼のような女だと思ってるのじゃないか。（訳：どうせ本当のことを言ってもあなたは信じないわ。）」

「姉上。誤解しないでください、姉上。僕が信じるのはいつだって姉上です。」

「先ほどあなたはわたくしの信頼を裏切ったばかりよ……」

私に寄り添うのを選ばず、シェイラ様の方に行こうとしていた。有体に言って物凄くショックだった。アルトがいざというときに庇うのは私ではなくシェイラ様の方なのだと言われた気がして。

「すみません。倒れていたからとりあえず起こそうとただけです。……でも姉上の方に駆け寄るべきだったと後悔しています。あの行動が姉上を傷付けたのなら尚更。」

「……。」

「姉上。もう僕は過去の僕とは違います。姉上がそんなひどいことをする人ではないと知っています。」

アルトが真剣に私を見つめる。

「……そんなの分からないわ。わたくしはずっとシェイラ様を引っ叩きたくてうずうずしてたもの。」

「ならそれはきつと僕のせいですね。少し懐かしい幻影に捕らわれていたようです。」

「……。」

「僕がシェイラと一緒にいることが姉上を傷付けるなら、もうシェイラとは袂を分かちます。」

「わたくしのせいでシェイラ様と生木を裂かれる思いをしたという

つもり？（訳：アルトが辛いならそんなことしないでいい。）  
「別に構いません。姉上が傷付く方が何千倍もつらいのです。」  
「……。」

私は隠していた左手をアルトに見せた。

「指輪？」

「…シェイラ様が投げた。」

アルトがぎりりと奥歯を噛んだ。

「とりあえず僕も探します。」

「シェイラ様は？」

「知りません。姉上を探すのに必死だったので。」

アルトは自分に縋るシェイラ様を振り払って私を探していたらしい。  
私は小走りに去ってしまったので、どこへ行ったのかわからず、色んな所を探していたようだ。

3人で指輪を探して夜明け頃、庭の木の枝がキラキラ光っているような気がする。とバーベナ様が言ったので、アルトが箒でつついたら指輪が落ちてきた。

「時間の無駄にならなくて残念でしたわね。（訳：良かった…）」

「もし時間の無駄になっていても、僕は今度はもっと美しい指輪を姉上に贈りましたよ。」

「アルトの愛はすぐ替えが利くのね。（訳：私にはアルトが贈ってくれたたった一つの指輪なのに。）」

「指輪はすぐ替えの利かない姉上とは違いますから。」

アルトは微笑んだ。

「バーベナ様も…一リルにもならない労働ご苦労様。（訳：本当にありがとう。）」

「一リルにもなるはずがないわ。友情に値段なんて付けられないもの。」

『リル』はお金の単位だ。

よく見るとみんな衣服が随分と汚れていた。ドレスの裾なんて泥まみれ。

「ちょっと切ない恰好ね。」

三人で苦笑いした。



## 宝物が増えた日

翌日いつものようにやってきたシェイラ様はデナートル家の門番に止められた。いつもは顔パスの素通りだったのでシェイラ様は驚いているようだ。門番は槍を翳してシェイラ様を威嚇している。

「アルト!？」

どうして自分がこのような扱いを受けるのかわからずに、アルトを呼んでいる。

アルトは門から大分離れたところからシェイラ様に声をかけた。

「シェイラ嬢。あなたには失望しました。」

アルトの口調は冷たく、他人行儀だ。視線も肌がひんやりするほどに冷たい。

「ち、違うよ。なんか誤解してるよ…! ロレッタ様に騙されてるんだよ!」

シェイラ様が必死に言い募る。シェイラ様は自信があつたのだろう。アルトがロレッタより自分を信じる自信が。

「シェイラ嬢。昔のあなたは可愛い妹の様でした。シェイラ嬢。今のあなたは僕の最愛の人を傷つける敵です。」

アルトの声は冷え冷えと響いた。

「アルト…思い出して！わたくしと過ごした日々を！」

「あなたと過ごした過去は、柔らかいものでしたが、あなたが土足で踏みにじってくれたので、もう僕には必要ないです。僕は最愛の人との未来だけを見つめます。出来ることなら、もう二度とお会いしたくない。」

「アルトお…アルトお…！」

シェイラ様がアルトを呼んで手を伸ばしている。門番がシェイラ様を通らせない。アルトはシェイラ様に背を向けて去っていった。私は屋敷の窓からそれを見ていた。

アルトが屋敷に入ってきた。私は駆け寄ってアルトの頬にキスした。アルトが微笑む。

「傷付いてないですよ。少し、疲れただけです。」

\*\*\*

夕食時アルトがお父様に尋ねた。

「父上。もしかしてプチリース家から縁談など届いてませんでしたか？」

お父様はニヤツと笑った。

「ようやくアルトもそれくらい考えるようになったか。シェイラ嬢の露骨なハニートラップで骨抜きになっていたらぶん殴ろうと思っていたところだ。縁談、届いてたぞ？アルトとシェイラ嬢をつてなついでに言つとプチリース家は領地で大飢饉があつたらしくて瀕死状態だ。もうあの家に売れるものはシェイラ嬢しかない。アルトが駄目ならどっかの大富豪の妾なんだろうな。うちはもうロレッタち

やんで決まってるから要らんとっておいた。」

「そういう情報はもつと早く教えてください。無駄に姉上を傷付けました。」

「馬鹿。惚れた女に悲しい顔をさせたのはシェイラ嬢じゃなくて自分だ。弁えろ。」

アルトがフォークとナイフを置いて私に向き直った。

「……………すみませんでした。姉上。」

「あら、それくらい許せないほどわたくしが狭量だと仰いたいの？

（訳：許すから気にしなくていいよ。）」

「姉上……………後ほど、僕の部屋にご足労願えませんか？」

「うん？うん。」

久しぶりに安心して食事をとった。最近なんだか食べているものの味もろくにわからないような状態だったから。張りつめてたんだなあ……と今なら思う。シェイラ様は可愛くて、素敵な思い出をいっぱい持ってたから、もしかしたらアルトが私じゃなくてシェイラ様を選ぶかもしれないって不安で。10年もアルトと一緒にいたのに幸福な思い出って最近のものばかりだね。幼少期はアルトが気になって仕方がない癖に口が悪いからいっぱい嫌われた思い出しかな

\*\*\*

夕食後、お茶を頂いてからアルトの部屋へ行った。  
アルトの部屋をノックする。

「どうぞ。鍵は開いてます。」

中に入った。整理整頓された、青を基調としたアルトの部屋。

「姉上…」

ベッドに腰掛けるアルトはどこか神妙な顔をしている。なんか真面目な話だったりするのかな。さつき謝ってくれたし、別れ話ではないと思うけど。

「姉上に、行き場のない思い出の片付けを手伝ってもらいたいのです。」

「？」

アルトは立ち上がると自分のベッドの下から箱を引きずり出した。茶色のレザーのちよつと大きめの箱で、箱を開けると中にはぬいぐるみやら綺麗な髪飾りやら、年頃の少女の好みそうなものがたくさん入っていた。

なにこれ？

アルトとあまり縁のなさそうな品々だ。

ふと目を留めたぬいぐるみに既視感を覚えた。手に取ってみる。やや大きめのふわふわのクマのぬいぐるみ。つぶらな黒い瞳がなんとも可愛らしい。

「それは姉上が子供の頃、店先でじつと見ていたぬいぐるみです。姉上の9歳のお誕生日プレゼントにするつもりで購入しました。」

「え…」

「本当は姉上に差し上げて喜んでもらいたかったのです。けれど、こき下ろされて突き返されてしまいそうな気がして、渡す勇気が出ずに、渡しそびれて、でも捨てるのが嫌で、僕がずっとおいたものです。」

ぎゅっとぬいぐるみを抱きしめた。ほんの少しだけ埃の匂いがする。

「こちらは真珠のイヤリング。姉上の１０歳のお誕生日プレゼントにするつもりでした。当時姉上は『真珠の森の人魚姫』という童話を好んでいらして、その中で出てくる桃色の真珠のイヤリングに憧れてらしたので、父上にねだって探してもらったのです。でもやはり当日になると渡す勇気が出なくて…」

箱の中身はみんなみんなアルトが私に贈ろうと用意してくれたものばかりだった。それも当時の私の好むものばかりが吟味してある。アルトは丁寧丁寧に当時の私の事と自分の心境を語りながら紹介してくれた。

「姉上は今更って思うかもしれませんが、全てが僕の姉上に対する思い出なのです。どうか姉上の手で適切に処置してやってください。」

私はくしゃくしゃに泣いてしまつてうまく返事が出来なかった。

「姉上。何にもなかったなんて仰らないでください。すれ違つてはいましたけど、思い出は沢山あります。僕は１０年間姉上を想つてきたのです。」

「アルト…アルト…」

アルトに抱きついてわんわん泣いた。幸福で胸がいっぱいで涙が出る。私がアルトを想つてきたようにアルトも私を想つてくれた。いたさき気ない優しさがたっぷり込められたプレゼントは全部私の宝物になった。



## 婚約者襲来（前書き）

婚約者襲来

自称婚約者は問題児

耳に砂糖を詰める

手紙の真相

の4部構成です。

今回は完璧なコメディです。別に笑えはしませんが、あまり笑いは期待しないでください。

## 婚約者襲来

「その婚約！物申します！！」

アルトと二人で夜会のホールの片隅で談笑していると、つかつかと歩み寄ってきた小柄な少女がびしっと私たちを指さした。

榛色の瞳は大きく、顔立ちは可愛いと言えないこともないが、背が低く、つるりとした額の広い女の子だった。髪を後ろにひつつめにして括り、結い上げている。ピンクのドレス姿で、社交界デビューしたばかりに思える。

「まあ、突然失礼な方ね。どこの無礼者ですか。（訳：お名前は何と仰るの？）わたくしはロレッタ・シエルガムですわ。」

「わたくしは、マリディ・ククルですわ。ククル子爵家のものです。アルト様の実母のメリッサ様がお認めになった、アルト様の正式な婚約者ですわ！」

私とアルトは顔を見合わせた。正式な婚約者って言った？アルトを見ても心当たりのなさそうな顔をしている。

「マリディ嬢？僕はその話、初耳なんだけれど…。もう姉上と結婚するつもりでいるし。」

アルトが戸惑った声を出した。私もお父様からそういう特殊な事情は伺っていない。生前のメリッサ様にお会いしたことはないけれど、そもそもアルトと出会って10年、マリディ様の顔など一度も拝見したことがない。



「婚約を反故になさるおつもりですか！？わたくしは生まれた時からアルト様の妻になるのだと育てられてきましたのよ！もし約束を反故にされるのでしたら、わたくしの15年間を返してくださいまし！」

どんな形で…と言われればやっぱりお金でだろうけど…この子はいしかしてお金目的で強請に来たのかな？ディナートル家は裕福だし。

「強請ですの？随分強欲ですね。」

「後からやってきて、白々しく婚約者面しているあなたにそんなこと言われたくありません！私とアルト様は15年前からの婚約者です。証拠もあります。言い逃れは出来ません！！約束を履行してわたくしと結婚してくださいまし！」

ゴリゴリ押してくるな。

「証拠とは？」

「メリッサ様が私の母に宛てた手紙です。アルト様の妻に私を迎える旨が記されております。」

自信満々である。ふくふくと小鼻を膨らませている。何かの珍妙な動物のような仕草だ。可愛い顔も台無しである。

「では手紙を持って後日我が家へいらっしゃってください。母はもう今は亡き身。父に事情を聞かねばならないので。」

「いいえ。今夜からお屋敷に私を迎えてください。ククル家は王都に屋敷を持っていないので。母もアルト様のお傍で花嫁修業をするように申しております。」

「急にそんなこと仰られても困ります。」

「困るのはこちらです。わたくしと婚約しておきながら別の婚約者

を作るなど！もう絶対に目が離せません。」

すごい無茶苦茶を言われているが、マリディ様はほぼ身一つで出てきたらしい。侍女が一人と護衛が一人と、着替えと日用品を持ってきてるっぽい。居座る気満々やね。証拠の手紙まで持ってきているご令嬢を「帰れ。」っと追い出すわけにもいかず、馬車も持っていないというので辻馬車を呼んでやった。マリディ嬢一人なら我が家の馬車に乗せても良かったが、侍女と護衛を入れると定員オーバーだからだ。

\*\*\*

ディナートル家にて。とりあえず放り出すわけにもいかないので、庭の向こうにある離れを侍女に掃除させている。その間にダイニングに全員揃って事情を聞く。

マリディ嬢の主張はこうだ。

母であるハンナ・ククルはメリッサ様と親友。母が腹に子を宿した際にアルト様は既に出産されていた。ハンナは「自分の子がもしも女の子であつたらアルト様の妻にどうだろう？」とメリッサ様に手紙でお伺いを立てた。するとメリッサ様からは是非にという返事が来た。その証拠の手紙がある。だから自分は母の胎にいた時分からのアルト様の婚約者である。正式な婚約証書ではないが、きちんと書面にされている。これを反故にするのは受け入れられない。ということである。手紙も見せてもらった。

《喜んでハンナ様のお嬢様をアルトの妻に迎えたく存じます。ハンナ様のお子であればきつと美しき淑女となられることでしょうし、光栄なお話かと存じます。

子供とは可愛いもの。早めに良縁を見つけてやりたい気持ちはよく伝わりました。

まずは男の子であれ、女の子であれ、無事なお子様を産まれることを心から願っております。

恵みの雨とは申しますが、やや肌寒く感じる季節。どうぞご自愛くださりますよう心からお祈りする次第です。

メリッサ・デイナーール》

かなり変則的なお手紙だが、確かにハンナ様のお嬢様をアルトの妻に……と書いてある。

「確かに手紙の文字自体はメリッサのものようだね。ちょっと右上がりの癖字が特徴的だ。」

お父様が認めた。

私は唸ってしまった。アルトはマリデイ様の婚約者なの？折角相愛になったアルトを盗られるのはすごく嫌だ。アルトが大好きなのだ。私はアルトのお嫁さんになりたい。でもメリッサ様のお手紙……

「ふふん。わたくしこそアルト様の未来の妻なのよ。生まれる前からの約束で15年間アルト様の為に花嫁修業に勤しんできたのですもの。」

マリデイ様は胸を張った。そして例のふくふくと小鼻を膨らませる独特の表情をされている。

「事情は分かったが、俺はメリッサからこの一件を聞いていない。そして貴族家の結婚は通常家長が決めるものだ。つまりメリッサではなく俺からの手紙でなければ意味がないね。」

お父様があっさり答えた。

「なっ！？約束を反故になさるというの！？」

「反故じゃなくて、初めから無効だと言っているのだよ。」

「そ、そんなの許せませんわ！わたくしの15年間を何だと思っていらっしやるの！？確かに家長はミカルド様かもしれませんが、メリッサ様がお腹を痛めて産んだ子ではないですか。メリッサ様の遺志を無駄にされるのですか！？」

「遺志…ねえ…まあ、即答は避けさせてもらうけれど、前提条件として、その手紙は無効だ。その上でメリッサの意図を調べてはみるよ。軽々しく約束をするような女性でもなかったしね。君は、もう今夜は休んだ方がいい。離れを掃除させたから。」

お父様は胡乱な目でマリディ様を見ていらっしやる。とりあえず家長であるお父様が手紙は無効だと仰るなら、安心して大丈夫なのだろう。ほっと息をついた。

お父様は侍従らを指示してマリディ様たちを離れに追いやった。

「父上…」

アルトが不安そうにお父様を見た。

「安心しておいで、アルト。ロレッタちゃん。こんな無理は通させやしないから。そもそもメリッサの親友がハンナ夫人というのも疑わしい話だ。でもね、ロレッタちゃんにお願いが…」

お父様に耳打ちされてちょっと困った顔になってしまった。

## 自称婚約者は問題児

マリディ様は中々の問題児だった。『招かれていない』お茶会に勝手に出席してしまう。ホストのご令嬢とは無論初対面。ホストの令嬢は迷惑な飛入り客に困りながらも温情で一つ席を増やしてください。私はこの情報を全然掴んでおらず、来てみてびっくりである。

「初めまして。アルト・ディナートル様の婚約者のマリディ・ククルですわ。」

堂々とそう挨拶した。

「マリディ様。スカス力のおつむに物を詰め込むことを御覚えになつたらいかがかしら？その件は無効であつたとお父様から証明されたでしょう。もうお忘れになりましたの？お若いのに記憶が怪しいなんてお可哀想ね。（訳：馬鹿なこと言わないで。その件は無効よ。他のご令嬢に誤解を与えないで。）」

「まあ、なんて口の悪い。意地の悪いご令嬢ですね、ロレッタ様。わたくしは15年間、アルト様の妻になるのだと言われて育ってきたんですもの。いくらミカルド様とて、細君のお約束を無視するようなことはされないわ。」

強気に嘯いた。

むしゃむしゃと茶菓子を食べている。何だか食べ方が下品で悪目立ちしている。決定的に優雅さが足りない。仕草は庶民の田舎娘そのものである。

「婚約者とはどういうことですか？」

他のご令嬢が尋ねる。

マリディ様が自信満々に手紙のことを述べる。自分は生まれる前からアルト様の婚約者なのだ！と。そして例の小鼻をふくふくと膨らませる動物的なアクションを取って令嬢たちにクスクス笑われている。

私はお父様が婚約の件をきっぱり無効だと述べたと説明する。マリディ様と睨み合う。

「幼馴染の次は婚約者ですの？素敵な婚約者を持つと気苦労が絶えませんわね。」

他のご令嬢が微笑んだ。最近は恋愛結婚が多いけど、貴族子女の結婚の最終決定権は家長が持つのが当たり前だから、みんな私の方に分があると思っているようだ。

「『自称』婚約者が来たくらい失笑かしませんでしたわ。（訳：幼馴染はともかく、マリディ様のことはそれほど気にしていません）」

シェイラ様の件は精神的に堪えるものがあつたけれど、今回の大分状況が違う。

アルトの心が揺れていないというだけでも随分安心感が違う。お父様からはつきり『無効』というお言葉を頂いているし。

「幼馴染に婚約者……なんて王道展開……！」

ハリエツト様も出席していらっしゃったらしくて、何やら身悶えている。ハリエツト様とは親しくお喋りしたことがないけど、アルトはとても良い方だと言っていたからいつかお話してみたい。

「わたくし、アルト様の婚約者として、恥じることがないようしっかり社交したいですわ。」

「マリディ様、あなたは不愉快な形容詞をつけないと喋れないんですの？（訳：『アルト様の婚約者として』って言うのはやめて。）」

「ロレッタ様はわたくしという正当な婚約者が現れて焦っているのね。ああ、こわい。意地悪されないかしら？」

「あなたのような図太いご令嬢を苛めるなどという無意味なことは致しませんわ。（訳：意地悪なんてしないよ！）」

私とマリディ様はやり合っているが、その様子が面白いらしく、他のご令嬢の気を引いてしまっている。ほんと、社交界は暇人ばかりだわ。

お茶を味わう。ふわりと漂う紅茶の香りが精神を癒してくれる。マリディ様はスタンドに入られているお菓子を次々と手に取って食べている。なんだか意地汚い感じだ。

私はパサリと扇子で口元を覆った。

「マリディ様。少しは遠慮なさったら？下品な食べ方が豚の様ですわよ。（訳：もう少し、控えめにしないと笑われちゃうわよ？）」

「まあ、まるで小姑ね。ああ、アルト様と結婚したらロレッタ様は正真正銘小姑になるんじゃないわね。ロレッタ様のように意地の悪い方は婚期になど恵まれないでしょうから、うちで冷や飯ぐらいをなさるのかしら？とても迷惑ですわ。」

「妄言も大概になさいまし。全てを持っているのはわたくしの方ですわ。（訳：アルトの心も、お父様の許しも、婚約指輪も私のものだわ。）」

「ほほほ。悔し紛れですのね。」

「あなた、馬鹿なのね。わたくしを疲れさせる天才だわ。（訳：意思の疎通の出来ない人との会話は疲れるわ。）」

まあ、私の場合、意思をきちんと疎通できる相手の方が少ないのだけれど。マリディ様の場合自信過剰の程度が少し酷すぎる気がする。<sup>マリディ様</sup>珍獣はご令嬢たちからある意味注目を集めた。どちらかという悪い意味でだけど。マリディ様ってなんだか言動に品がないのよね。「社交する」って言ってた割にはむしろむしろ食べてばかりいたし。私も特殊言語の使い手だから社交は苦手だけどね。大抵のご令嬢にはあまりいい人だとは思われないし。

\*\*\*

マリディ様の頭の痛い行動は続いた。夜会用のドレスと宝飾品を仕立てたのだ。ディナートル家のツケで。商人に請求書を回されてびっくり。

「マリディ嬢。勝手な真似をされては困る。」

お父様が苦言を呈した。当たり前だ。手紙を持つてるとはいえ、婚約者未満のご令嬢。離れに泊めて、食事を与えているのだって温情だというのに何を思っでツケ払いで買物など。厚かましいにもほどがある。

「将来の妻に恥をかかせないのは当然のことですわ。」

マリディ様は蛙の面に水である。しかもお金をたっぷりかけた最高級品を仕立てたんだよね。商人もディナートル家が払うと信じて快くツケ払いにしたらしい。

「アルトの将来の妻はロレッタちゃんだ。マリディ嬢ではない。請求書はククル家に回させていただく。我が家の名前を勝手に使うの



は止めていただきたい。」

「そんな！勝手なことはなさらないでくださいまし！」

「勝手なのはどちらだ――！」

お父様も頭を抱えていらつしやる。とんだ食客が増えたものである。マリデイ様はいくら「あなたはアルトの婚約者ではない。」とお父様が告げてても手紙を盾に取り、亡き細君の、アルト様の片親の、立派な遺志である。と言って譲らない。とても面の皮が厚い。剥がしてみたら定規で測れるのではないかしら？

お父様は各商人筋にマリデイ・ククルは屋敷に泊めてはいるが、当家とは関わりなく、金銭を建て替える予定はない。と情報を流していた。デйнаトール家の払いを完全に当てにしていた商人は、態々ククル家のある地方まで行かなくてはならないようだ。ご愁傷様。ククル家が支払いを行わないようだ。マリデイ様はデйнаトール家の名前をちらつかせて商人を騙した詐欺師なんだが。大丈夫なのだろうか？「マリデイ様を泊めてるじゃないか！関わりあるだろ！」とデйнаトール家に火の粉が降りかからないことを祈る。

## 耳に砂糖を詰める

夜眠っていると突然布団が剥がれた。

「きゃあっ！」

目を開けると薄絹一枚纏っただけの姿のマリディ様がいらっしやる。如何にも情事を予感させる扇情的なスケスケの紫の薄絹ではあるけれど、マリディ様の子供子供した体型とミスマッチしていて、やや滑稽な印象のする夜着姿だ。

『隣に寝ていた』アルトも目を覚ました。二人で起き上がる。

「…マリディ嬢…こんな夜中に何の御用かな？扉には鍵がかかっていたはずだけど。」

「なっ、なっ、なっ…なんでロレッタ様と同衾していらっしやるの…！！？」

私とアルトは一緒に寝ていたのだ。別に疚しいことはなく、二人とも服を着ているけれど。

「愛する者同士が同衾していたら何かおかしいかな？それよりそんなはしたない恰好で紳士の部屋に夜中訪れるマリディ嬢の神経を疑うね。どういふつもりで来たの？」

まあ、夜這いに来たんだろうね。お父様はこのことを予想されて、私に夜はアルトと一緒に眠ってほしいと依頼してきたのだ。何もないとはいえ未婚令嬢が殿方と同衾……とは思うがアルトと私が既に貫通済みだということは、社交界ではそれなりに知られているので、

今更だ。もう結婚するつもりでいるし。

「婚約者であるアルト様に夜伽を……」

「マリディ嬢の夜伽は未来永劫必要ないよ。僕の隣は見ての通り姉上で埋まっているからね。」

アルトが私の耳に口付けた。

ちよつと恥ずかしいけど嬉しい。

マリディ様は悔しそうな顔をして去っていった。あの薄絹一丁で離れからこの部屋まで来たのだろうか。なんと肝の太い。

「危なかったですね。姉上がいてくださらなかったら、何もなかったとしても薄絹一丁のマリディ嬢と僕が二人きりで、夜部屋にいたという既成事実が作られてしまうところでした。」

「手段を選ばないところには感心しますわ。とても迷惑ですけど。」

「

アルトは私を抱きしめた。

「でも誰憚ることなく、姉上と同衾できるのはいいですね。役得です。」

「……一年の禁欲は守ってくださいるのよね？」

おねーちゃんウェディングドレスはマーメイドラインに決めてるの。もうデザインは出来てるし、作製も始まっているから。

「姉上の綺麗なドレス姿を拝むために我慢はしますよ。僕だって楽しみにしていますから。」

アルトは微笑んだ。

「でも一年後はたつぷり姉上を味わわせてくださいね。」

耳元で甘く囁かれた。

怪しげなことはしなかったけれど、二人でイチャイチャした。

\*\*\*

翌朝、確かめてみたがアルトの部屋の鍵は、なんだかピッキングツールのようなものでこじ開けられていた。大泥棒も真つ青な見事なお手並みである。とても貴族令嬢などとは信じられない。ククル家はどのような教育をマリディ様に施されたのだらう。ちょっと興味が湧いた。

アルトは新しい鍵を付け替えてもらえるように職人に依頼していた。

\*\*\*

マリディ様は仕立てたドレスで意気揚々と夜会に出かけた。……辻馬車で。ディナートル家はマリディ様にこれ以上便宜を図るつもりはなかったのだ、馬車を融通しなかったのだ。

「わたくし、アルト・ディナートル様の婚約者の、マリディ・ククルです！！」

そう挨拶して回っている。

お茶会で手紙のこともお父様の決定のお話もしたので、夜会会場でマリディ様の言葉を真に受けるものは少ない。ただ、とても鬱陶しくはある。蠅がぶんぶん身の回りを飛び回っているような。

アルトと私は二人で寄り添って仲睦まじさをアピールしている。

「今度は婚約者ですってね。色男を恋人に持つと辛いわね、ロレッタ様。」

バーベナ様がやってきてニヤツと笑った。

「平穩無事に恙無く婚約状態を保っておられるバーベナ様の婚約者様は色男ではないという意味かしら？（訳：何事もなさそうで羨ましいわ。）」

「ほほほ。まあ、これくらいの事件なら人生のスパイスなのではなくって？」

「あまり味のよくないスパイスですわ。」

私も平穩無事な蜂蜜のような甘い日々を過ごしたいのに。

アルトは私を一度ハグすると、バーベナ様に私の隣を譲って、社交に行った。私はバーベナ様が聞いてきた社交界の噂を又聞きしている。自分の力でこれくらいの噂が集められたらいいのに。

バーベナ様と軽食を摘まんでまったりしていると、「離れてください。」というアルトの声が聞こえた。ちらりと見るとアルトにマリディ様がキスしようとしているらしい。ちゅうちゅうとタコのように唇を尖らせたマリディ様が背伸びしてアルトに迫っているが、身長が低くて届いていない。アルトもマリディ様のつるりとした額を掌で押して拒んでいる。中々滑稽な様子ではあるが、面白がって見ているわけにはいかない。

私はアルトの元へ行き、マリディ様を引きはがした。

「まあ、なんてはしたないのでしょ。嫌がる紳士にキスを迫るだなんて。他人の迷惑を顧みない、良識を疑いますわ。（訳：嫌がってるから止めてあげて。）」

「ほほほ。わたくしたちがいい雰囲気になっっているから焦っているのね。ロレッタ様。」

「あなたの目は節穴なの？（訳：全然いい雰囲気ではなかったわ。）」

マリディ様を追い払った。

「あの根性はすさまじいですね。世の中には変わったご令嬢が沢山いるのだと知らされました。」

アルトはうんざりした顔をしている。

「同じ『変わった令嬢』でも、姉上はこんなに可愛いのに。」

「まあ、アルト。立ったまま目を開けて眠るなんて器用ね。（訳：私が可愛いなど、寝言だわ。）」

「寝てませんよ。姉上は世界一可愛いです。」

「耳が腐り落ちそうだから止めて。（訳：恥ずかしいからそんなこと言わないで。）」

私は少し照れて赤くなってしまふ。

「嫌です。僕は姉上の耳にたっぷりお砂糖を詰めるつもりなのですから。」

アルトが笑って私を抱きしめて甘い言葉を囁いた。すごく恥ずかしいけど、ちょっと嬉しくてアルトの腕の中で頬を染める。

マリディ様…いい雰囲気ってこういうのを言うのではなくて？

## 手紙の真相

マリディ様はお父様に呼び出された。「遂に婚約が正当なものと認められる！」とマリディ様はウキウキである。そんなはずはないわけ、私は白い目で見ているけれど。

リビングにはお父様、お母様、アルト、私、マリディ様が着席している。

「まずマリディ嬢。あなたとアルトとの婚約はあり得ない、と明言させていただく。」

「なんですって!？」

お父様の発言にマリディ様が目を剥いた。元々マリディ様との婚約が認められるなどと、誰も思っていなかったので、マリディ様以外の誰も驚かない。

「マリディ嬢。調べさせてもらったが、あなたは一昨年までサンズクロス家の御子息と婚約されていたね？15年間アルトと婚約するために花嫁修業をしていたというのは嘘だ。」

「……。」

マリディ様が顔を顰めた。

「メリッサがハンナ夫人と友人関係にあったというのも甚だ疑わしい。メリッサの生前の日記を読んでみたが当時のハンナ夫人のことを『驚くほど厚かましい、品のない田舎令嬢だわ』と記していた。『母を侮辱するつもりですか!！』」

マリディ様が怒りで顔を染めた。私はマリディ様のことを「驚くほど厚かましい、品のない田舎令嬢だわ」と思っていたので、きっとマリディ様はお母様とよく似ていらっしゃるのだらう。

「侮辱しているのはどちらかな？」

お父様は紅茶で唇を湿らせた。

「メリッサは用心深い女性だった。誰かに手紙を差し上げる際には必ず写しを保管していた。量が膨大だったので、探すのに手間取ってしまったが、マリディ嬢が手にしていた手紙の写しもちやんとあったよ。」

マリディ様が顔色を変えた。お父様が手紙の写しを開示する。お手紙は便箋二枚に渡って綴られていた。全員で覗き込む。

《ハンナ・ククル様

空からきらきらと慈雨が零れ、紫陽花色づく季節になりました。近頃めつきり筆が遅くなり、ご挨拶もままならぬことが多くなってきました。まいりましたが、ハンナ様はいかがお過ごしでしょうか。

ご懐妊されたというおめでたいニュースは聞き及びました。遅ればせながらお祝い申し上げます。わたくしも先日経験いたしました。出産というのはとても大変です。しかし日々お腹の子の胎動を感じては喜びに顔がほころんだものです。産み落とした時は世界で我が子が一番可愛いに違いない！などと親ばかなことを思ったものです。きっと世の母親とは、皆そのように我が子を慈しむものなのでしょうね。

ハンナ様が先日のお手紙でご提案されていたお子の将来について。ハンナ様はご自身に生まれた子供が娘であれば、将来はアルトの妻



にとお望みとのことですね。お話は大変ありがたいことながら、現時点でそれを決断するのは時期尚早と存じます。わたくしは16でミカルドに見初められ、ミカルドと相愛になり結婚いたしました。わたくしは我が子にも多少の家格の差があつたとしても愛する伴侶を娶らせたいと考えております。今はお答えが出せませんが、アルトが年頃になつた時、ハンナ様のお嬢様と相愛となつた暁には、》

そこで一枚目の便箋がいっぱいになつてしまつたらしく二枚目の便箋に文字が移っている。

《喜んでハンナ様のお嬢様をアルトの妻に迎えたく存じます。ハンナ様のお子であればきつと美しき淑女となられることでしょうし、光栄なお話かと存じます。

子供とは可愛いもの。早めに良縁を見つけてやりたい気持ちはよく伝わりました。

まずは男の子であれ、女の子であれ、無事なお子様を産まれることを心から願っております。

恵みの雨とは申しますが、やや肌寒く感じる季節。どうぞご自愛くださりますよう心からお祈りする次第です。

メリッサ・ディナートル》

と書かれていた。マリディ様は手紙が上手いこと区切られているのいいことに、2枚目の便箋だけを手に持つて「私が認められた婚約者だ」と喚いていたらしい。あまりの厚かましさに開いた口が塞がらない。……………これって詐欺って言わない？

「もとより俺はマリディ嬢をアルトの妻になどとは認めていないが、メリッサも別にマリディ嬢を妻にとは考えていなかったようだな。きちんと『アルトが年頃になつた時、ハンナ様のお嬢様と相愛とな

った暁には』と条件づけられている。アルトの心はロレッタちゃんのものだからこの条件を満たしていない。」

マリディ様は悔しげな顔をしていた。

「俺はハンナ夫人とは面識がないが、このようなことをするあたり、メリッサが言うように『驚くほど厚かましい、品のない田舎令嬢』としか言いようがないな。面の皮の厚さには感服する。……というわけだから、明日には離れを出て行ってほしい。あなたは当家には何の関わりもないご令嬢だからな。」

「ひとでなし！」

「それはこちらのセリフだよ。可愛い息子と娘の一生を台無しにされる場所だっと思えば不愉快極まりない。」

お父様が冷たく断じた。マリディ様がギリギリとお父様を睨んでいたが、お父様の冷たい態度が変わらないのを見ると乱暴に席を立った。

「災難だったな。二人とも。」

お父様に同情された。

とりあえず嵐のようにやってきた厚かましい令嬢は追い払えたらしい。ほっと息をついた。

\*\*\*

「わたくしこそが正当なデミアス様の婚約者！きちんと証拠の手紙がありますもの！おほほほ。」

マリディ様は田舎に引つ込むのかと思いきや、堂々と社交界に居座

つて次なる犠牲者をつついている。どうやらハンナ様が持ち得る手<sup>カ</sup>紙は複数であつたらしい。先日アルトの婚約者だと言って回つていた事実はマリデイ様の脳内からはさっくり削除されているようだ。なんと融通の利く脳味噌だろう。

次なる標的となつてしまったデミアス様は迷惑そうな顔で抗弁している。

うつかり夜這いなどかけられて既成事実を作られないようにね…私はそつとデミアス様の無事をお祈りした。

## 素直な言葉（前書き）

今回は最初以外翻訳を（）でつけていません。

## 素直な言葉

先日とあるご令嬢に素敵なお庭を拝見させていただいたので、感想を述べた。

「先日、あなたの鼻を天狗にさせているお庭を拝見しましたわ。恐ろしく派手なところでしたわね。（訳：先日あなたのご自慢のお庭を拝見しましたわ。とても華やかなところでした。）」

口に出してから「またやってしまった…」と思った。どう聞いても褒め言葉ではない言葉が唇からするする出てきてしまう。ただ単に綺麗なお庭で感心しましたという感想が述べたかっただけなのに。私に声をかけられたご令嬢は案の定真っ赤になって怒った。

「まあ、なんて失礼な方でしょう。ロレッタ様にお庭など見せるものではありませんでしたわ！」

怒って立ち去ってしまった。……ああ、また怒らせた。どうして私にはこんな悪癖がついているのだろう。直そうとしたことは何度もあったが、どうしても直らないのだ。私の口語言葉はいつも不思議な形で口から飛び出してきてしまう。相手を怒らせてしまったことに凹んだ私はしよげ返った。

「姉上……」

アルトが心配そうな顔をしたので薄く微笑んで見せた。アルトは優しく私を抱きしめてくれた。

\*\*\*

懲りることなく夜会に出席した。私が夜会に出たところで碌な人脈も作れないし、情報収集など夢のまた夢だということとはわかっているが、いつか素直な言葉を口に出せるかもしれないし、私が上手にお喋りできなくても、私の意思を汲み取ってくださる方が現れるかもしれない。淡い希望を胸に夜会へ出かけるのだ。夜会自体もきらきらして華やかでなんとなく心躍る風景で好きだしね。

「今日のあなたの髪飾りはとても派手ね。目に煩いわ。」

私は一人の令嬢の髪飾りに目を留めた。とても綺麗な髪飾りをしていたのだ。カラフルな宝石を上手い具合に調和させてまとめ上げた虹の様な髪飾り。髪に虹がかかっているみたいで、素敵だと思った。私に口を出されたご令嬢は嫌そうな顔をした。

「今の姉上の言葉は『今日のあなたの髪飾りはとても華やかですね。目に楽しいです。』という意味です。」

隣にいたアルトが真面目ぶって解説した。

「ア、アルト……」

私は戸惑った声を漏らす。アルトの解説は間違っていないのだけけれど、自分のひねくれねじくれた言葉をストレートに解説され直すのは恥ずかしい。アルトの解説を聞いたご令嬢は戸惑った様子で返事を返した。

「あ、ありがとうございます。テラント通りにある『クラーレス宝飾店』というところの新作なのです。一点物しか取り扱わないお店

で、石も厳選された特上品を使っているのです。職人の腕も良くて……」

「まあ。一点物……確かにあなた程度にしか似合わないような奇妙な飾りですわ。」

「今のは『あなたにしかつけこなせないような絶妙な一品ですね』という意味ですよ。」

アルトが解説した。

本当に絶妙なのだ。あんなにカラフルな石を使ったら下品になりかねないのに、そんな印象は全然なくて、綺麗にまとまっていて、更にさりとしたご令嬢の黒髪にはよく映えている。多分その黒髪こそは最もその髪飾りの似合う髪だと思う。よく似合っている。

「…ありがとうございます。色んな品があつて、中にはロレッタ様にお似合いになりそうなものもありましたわ。」

「それならいずれわたくしの身を飾る栄誉ある宝飾品を購入するのにも考えないことはないですわ。」

「今のは『そんなに素敵な宝飾品があるのならわたくしも購入してみようかしら?』という意味です。…僕も姉上にプレゼントできるかもしれないお店と覚えておきましょう。」

令嬢はくすくすと笑った。

「ロレッタ様つて、ずっと嫌味な方だと思ってましたけれど、実は面白い人ですね。」

「ふん。どうせわたくしはあなたの思う通り嫌味な人間ですわ。」

「今のは謙遜しているつもりなんですよ。」

アルトの解説を聞いて令嬢がぶつと噴き出した。

「ア、アルト！なんなのです。先ほどからわたくしの言葉を解説したりなどして……！」

私は照れて真っ赤になった。

解説はまさに正しいのだけれど、それを真横に張り付かれてやられるのはすごく恥ずかしい。ひねくれた私の言葉が素直に翻訳され直されてしまうなんて。

「ロレッタ語を布教しようかと思ひまして。姉上はこんなに可愛らしいご令嬢なのに喋る言葉がみなと違うから誤解されて傷ついて。悲しむ姉上はもう見たくないの、姉上が本当はどんなに素敵で可愛らしいご令嬢か、みんなに知ってもらうつもりです。」

「余計なお世話ですわ。」

「僕はお節介焼きで、姉上に恋する男なので十分にお節介を焼かせてもらいます。昔は姉上が僕以外の誰かと親しく喋るのが嫌で嫌でたまりませんでした、今は姉上とは相愛。安心して姉上の良さをみんなに伝えることが出来ます。」

アルトが断言した。

アルトはずっと私の回りについて回ることにしたようだ。とってもやりづらんだけど。でもアルトと一緒にいられるのは素直に嬉しくもあって拒否もできない。

「ちょっと！邪魔よ。でかい図体して目が節穴なの！？」

私は体の大きな男性に注意した。注意された男性はムツとした顔でこちらを睨んだ。

「今のは『あなたの周囲に小柄な女性がいるようだから注意してあげて。あなたのような遅い方にぶつかられたら怪我をしてしまう



わ。』という意味です。」

アルトが真面目腐って解説した。アルトの解説を聞いた男性は周囲に背の小さく華奢な女性がいるのに気が付いて、申し訳なさそうな顔をした。

「すまない…気を付ける。」

「人間は出来損ないですわ。」

ツンケンした態度で述べる。

「今のは『人間誰しも失敗はあるものですから、大丈夫ですよ』という意味です。」

「ありがとう。」

悔しいことに…本当に悔しいことにアルトの解説は全体的を射ている。10年間の言葉のすれ違いは何だったのだろうか…というくらいアルトはロレツタ語を見事に翻訳した。

アルトが一々真面目腐って解説するのが面白いのか衆目が集まってしまうている。流石にこれほどたくさんの人々に注目されてしまうのは、恥ずかしく、身の置き所もない。

「鬱陶しいわね！こつちを見ないでくださいまし！」

私が真っ赤になって周囲に怒鳴る。

「今のは『恥ずかしいからじろじろ見てはイヤ！』という意味ですよ。」

アルトがにつこり笑って解説すると周囲にいた人たちがどつと笑い

だしてしまった。私は恥ずかしくなってますます真っ赤になる。

「なんだか面白いことをしているじゃない。」

ニヤニヤしたバーベナ様がやってきた。

「そんな憎たらしい表情を浮かべていないで、弟の恥ずかしい奇行を止める手伝いでもしてくださいまし。」

「今は『ニヤニヤしてないでアルトに恥をかかされているわたくしを助けて!』という意味ですが、バーベナ嬢に翻訳は必要ないですネ?」

「ええ。勿論。ロレッタ語に関しては私の方がアルト様の先輩ですわ。」

「それはすごく悔しいです…」

アルトが無念そうな表情を浮かべた。

バーベナ様は面白がってアルトと共にロレッタ語を解説し始めた。周囲の人間は面白がって聞いているようだった。「なんと、そんな意味なのか!では以前私がかけられたあの言葉は…」などと過去の発言の推理ゲームまで始まってしまった。すっかりいい見世物になってしまった。

\*\*\*

家に帰って椅子に座ってハーブティーを飲みながら嘆いた。

「今夜は散々でしたわ。」

「僕は姉上の素敵なところをみんなに知ってもらえて満足です。」

アルトは満足そうに笑っている。

確かに私の印象は劇的に変わっただろうけれど、恥ずかしいものは恥ずかしい。初めからアルトの解説のような素直な言葉を告げられるくらいなら、こんな悪癖は身についていないのだから。

「アルトのばか。」

「ふふふ。馬鹿でも良いですよ。僕はずっと姉上にイカレた大馬鹿者ですから。」

アルトが私を背中から抱きしめてきた。

「姉上。可愛い。好きです。」

甘く囁く。

私は可愛くないことを言いそうになる口を必死で窘めて言葉を紡いだ。

「アルト…好き…」

ちゅっちゅっとうちにキスされた。とても甘い気持ち。素直な言葉は舌が痺れるほど甘かった。

## 素直な言葉（後書き）

一応これでひと段落とさせていただきます。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n6291ep/>

---

姉上。スカートをまくって股を開いて見せてくれませんか？

2018年6月3日16時19分発行